

21世紀のための友情計画
アフターケア調査チーム報告書

平成3年(1991年)度

平成4年9月

国際協力事業団

青 業

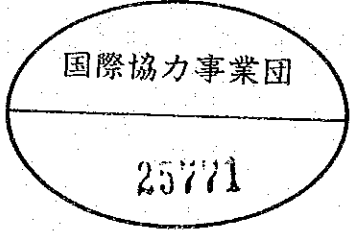
J R

92 - 716

JICA LIBRARY



1110533(5)



国際協力事業団

25771

21世紀のための友情計画
アフターケア調査チーム報告書

平成3年（1991年）度

平成4年9月

国際協力事業団

はじめに

この報告書は、昭和63年度より開始された「21世紀のための友情計画」アフターケア調査チーム派遣に係る、平成3年度実施団体の報告をとりまとめたものです。

アフターケア調査チームは、ASEAN青年の日本への招へいをもって開始された青年招へい事業を、双方向の交流に発展させ、彼我の青年の永続的な友情関係を樹立することを目的として派遣しており、平成3年度は、6チームをそれぞれブルネイ・シンガポール、インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイ及び韓国へ派遣することができました。

この報告書が、関係各位の本事業に対するご理解を一層深め、今後同チームに参加される方々の参考となれば幸いです。

平成4年9月

研修事業部長
諏訪 龍

目 次

はじめに

I 概要報告	1
II 国別報告	
1. ブルネイおよびシンガポール	3
2. インドネシア	25
3. マレーシア	55
4. フィリピン	95
5. タ イ	123
6. 韓 国	145
III 参考資料	
1. 派遣要領	167
2. 標準日程表	170
3. 実施分担表	171
4. 参加候補者推薦要領	172
5. 業務実施契約書	177
6. 留意事項	183
7. 報告書作成要領	185
8. 選考委員会開催案内	186

ブルネイ



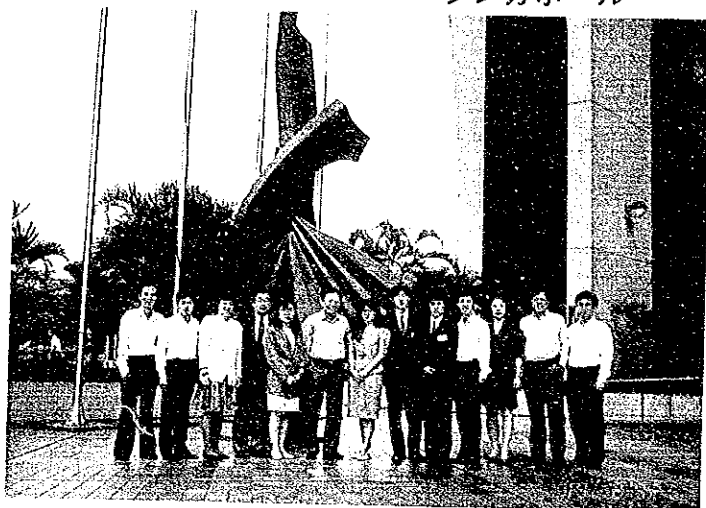
福祉青年スポーツ省の
帰国青年と

ブルネイ同窓会による
アフターケア調査チームの
歓迎会



ホストファミリーとの
ひととき

シンガポール



国家開発省表敬訪問

ゴ-夫人との夕食会



セントーサ島観光

インドネシア



ジョグジャカルタの
遺跡にて、ホストファミリーと

ジョグジャバガボンでの
夕食会



ホストファミリーの
家にて

マレーシア



・戦没者慰霊塔の参拝

・南国の味を楽しむ



・帰国青年とのひととき

フィリピン



PAJAJFA による
歓迎夕食会で
バンブーダンスに挑戦

ホストファミリーに
空手の手ほどき



PAJAJFA のメンバーとの
さよならパーティー

タイ

同窓会のメンバーとの
夕食会



チェンマイでの歓迎

さよならパーティー



韓国

利川の窯元



板門店にて

交流会



I 概 要 報 告

I 概要報告

1. 目的

青年招へい事業において我が国での交流プログラムに参加した日本青年等を ASEAN 諸国等に派遣し、ASEAN 青年の本邦招へいをもって開始された本事業を双方向の交流に発展させ、専門分野別に本事業参加経験者の日本理解及び研修成果を更に深め、再交流を促進し、来日時に形成された友情を更に発展させ、永続的な友情関係を樹立することを目的とする。

2. 派遣対象者

都内分野別プログラム関係者、分野別地方プログラム関係者、共通プログラム関係者等
「21世紀のための友情計画」日本側交流関係者

3. 派遣国、チーム編成等

ASEAN 6 カ国及び韓国に対し、1 カ国につき 1 チーム（ただし、ブルネイとシンガポールはあわせて 1 チーム）各 5 名、合計 6 チーム（29 名）を派遣。

チームの編成は、チームリーダー 1 名と団員による。

4. 派遣日程等

派遣国	実施協力団体	派遣期間
ブルネイおよび シンガポール	日本経済青年協議会	平成4年2月11日 ～2月21日
インドネシア	日本ユースホステル協会	平成4年3月 9日 ～3月18日
マレーシア	ユースワーカー能力開発協会	平成4年2月23日 ～3月 4日
フィリピン	日本国際生活体験協会	平成4年1月14日 ～1月23日
タイ	日本青年協議会	平成4年1月28日 ～2月 6日
韓国	国際協力サービスセンター	平成4年2月18日 ～2月23日

Ⅱ 国 別 報 告

ブルネイおよび
シンガポール

平成4年2月11日～2月21日

社団法人 日本経済青年協議会

1. 調査チーム派遣概要

1-1 調査チームの構成

氏名	齊藤 孝司	年齢：36才	性別：男性
現住所	〒165 東京都中野区沼袋4-1-17-202		TEL03-3385-1856
所属先	(株)日本経済青年協議会 業務企画部係長		TEL03-3469-2381
氏名	川副 靖	年齢：29才	性別：男性
現住所	〒411 静岡県三島市東大場2-6-12		TEL0559-81-1301
所属先	東京ガス(株) 住設営業グループ		TEL045-474-7366
氏名	丸山 実	年齢：28才	性別：男性
現住所	〒708-15 岡山県久米郡柵原町大戸84		TEL0868-62-2372
所属先	津山市役所 企画広報課主事		TEL0868-23-2111
氏名	青山 節子	年齢：36才	性別：女性
現住所	〒690 鳥根県松江市朝酌町620		TEL0852-39-0075
所属先	(株)鳥根銀行 事務総括本部電子計算課		TEL0852-24-1234
氏名	峯岸 恵美子	年齢：25才	性別：女性
現住所	〒198 東京都青梅市友田町4-252-11		TEL0428-24-2467
所属先	日野自動車工業(株) 海外生産部主務		TEL0425-86-5514

1-2 調査日程 及び 主要面談者

月日	時間	日 程	主要面談者
2/11 (火)	18:00	ホテルセントラザ成田にてオリエンテーション後、同ホテル泊	
2/12 (水)	12:45 19:15 21:25 23:30	成田空港発 (SQ97) シンガポール チャンギ空港着 シンガポール チャンギ空港発 (RB431) ブルネイ パンダル・スリ・ブガワン空港着	* 橋本東一 JICA ブルネイ事務所長 * HJ. MOHD. TAIB BIN HJ. OSMAN : President of Alumni Society 21st Century * 同窓会青年による出迎え
2/13 (木)	0:20 9:00 10:00 12:00 14:00 15:20 20:00	アングスホテル着 同窓会事務局長 Mr. TAIB によるブリーフィング 於) アングスホテル ロビー JICA ブルネイ事務所訪問 ナショナル・スタジアム見学後、福祉青年 スポーツ省主催昼食会 於) スタジアム内レストラン 大蔵省経済企画庁訪問 日本大使館表敬訪問 (吉田大使公邸訪問) 同窓会主催夕食会 於) チャイニーズ・レストラン	* HJ. MOHD. TAIB BIN HJ. OSMAN * AWANG HAJI MOHD NOOR BIN HAJI SALLEH : Secretary General of Alumni Society 21st Century * 橋本東一 所長 * PG ASMALLEE BIN PG AHMAD : Director of Welfare, Youth & Sports Dept., Ministry of Culture, Youth & Sports * 橋本 JICA 所長、他 * Mr. MURNI 他3名 * 吉田重信特命全権大使 * 小宮山博一等書記官 * 小田切敏郎二等書記官 * 橋本 JICA 所長 * MOHAMED HJ TAMIN 他、同窓会青年5名
2/14 (金)	9:40 11:10 14:30	同窓会青年との意見交歓会 テーマ: 21世紀のための友情計画の効果と展望 於) ナショナル・スタジアム 同窓会青年との昼食会 於) ナショナル・スタジアム 各自、ホームステイへ出発	* HJ. MAHD. TAIB BIN HJ. OSMAN * AWANG HAJI MOHD NOOR BIN HAJI SALLEH * 同窓会青年19名
2/15 (土)	8:30 9:20 11:20 12:30 14:10 19:30	ホームステイ先からホテルへ集合 ヒストリー・センター見学 メカニカル・トレーニング・センター見学 Mr. TAIB 主催昼食会 ハンディー・クラフト・トレーニング・ センター見学 フェアウェル・パーティー 於) アングスホテル内レストラン	* HAJI AWANG MUHAMMAD JAMIL AL-SUFRI : Director of History Centre * MOHD HUSAIN BIN HJ AWG BESAR: Act Principal * HJ. MOHD. TAIB BIN HJ. OSMAN * AWANG HAJI MOHD NOOR BIN HAJI SALLEH * HAJI NAYAN HAJI NORDIN * ZAININ HJ KASSIM : Business Manager of Arts & Handicrafts Centre * HJ. MOHD. TAIB BIN HJ. OSMAN * AWANG HAJI MOHD NOOR BIN HAJI SALLEH * 橋本 JICA 所長 * 小宮山一等書記官 * 同窓会青年、ホスト・ファミリー、他

月日	時間	日 程	主要面談者
2/16	10:20 (日)	ブルネイ バンダル・スリ・ブガワン空港発 (RB 451)	* HJ. MOHD. TAIB HJ. OSMAN 橋本* JICA 所長 * 同窓会青年、ホスト・ファミリー、 他による見送り
	12:10 13:30	シンガポール チャンギ空港着 ウェスティン・スタンフォードホテル着 (18:30迄自由行動)	* JICA 送迎委託会社による出迎え
	18:30	JICA シンガポール事務所員 石田氏による フリーフィング	* 石田幸男 JICA シンガポール事務所員
	19:00	意見交換会及び懇親会 於) ウェスティン・スタンフォードホテル 70F セントーサ・ルーム	* 倉重高子 専門調査員 * 星達雄 JICA シンガポール事務所長 * 石田幸男 JICA シンガポール事務所員 * Ms. CHRISTINE J. H. LOH : JICA シンガポール事務所 Programme Officer * SAJafa メンバー18名、他
2/17	10:00 (月)	JICA シンガポール事務所訪問	* 星達雄 所長
	11:00	日本大使館表敬訪問	* 長塚徹一等書記官
	12:00	帰国青年との昼食	* Ms. SIM BEE HEA 他、帰国青年3名
	15:00	外務省 ASEAN 局長表敬訪問	* Mr. TOH HOCK GHIM: Director of ASEAN
	19:00	JICA シンガポール事務所長 星所長主催夕食会 於) レストラン" Singa Inn	* 星 JICA 所長 * 石田 JICA 所員 * Ms. CHRISTINE
2/18	10:00 (火)	日本-シンガポール AI センター プロジェクト視察	* 石崎俊工 学博士 * Mr. SAW KEN WYE: Deputy Director
	11:30	昼食 (各自)	
	14:45	人民協会表敬訪問	* Ms. ESTHER TAN: Director of Youth Division * Mr. TAN KIA JIN: Deputy Director of Youth D. * Ms. SHERMBEN TAN BEE KIAW: Head of Youth Div.
	17:00	セントーサ島観光	* 帰国青年4名による案内
2/19	10:15 (水)	国家開発省表敬訪問	* Mr. LIM SAH SOON : Director of Social Defence & Community Relations Division, Ministry of Community Development 他、帰国青年3名を含む職員7名
	12:50	ホテル着 (19:00迄自由行動)	
	19:00	同窓会長 Mr. CHRISTOPHER 主催夕食会 食後、2グループに分かれてホッパ (Mr. CHRISTOPHER 及び Mr. GOH 宅)	* Mr. CHRISTOPHER CHAN: President of SAJafa * Mrs. CHAN * Mr. GOH LAN KIONG * Mrs. MAUREEN GOH
2/20	9:45 (木)	JICA シンガポール事務所へ挨拶	* 星達雄 所長
	11:00	ホテル着 (18:30迄自由行動)	
	19:00	フェアウェル・パーティー 於) インドネシア料理レストラン	* 帰国青年14名
2/21	10:20 (金)	シンガポール チャンギ空港発 (SQ12)	* Mr. CHRISTOPHER CHAN * Mrs. CHAN * SAJafa メンバー1名による見送り
	17:10	成田空港着	
	18:30	解散	

2. 現地活動報告

2-1 主要訪問先に於ける説明及び意見交換内容

● ブルネイ・ダルサラーム

(1) 同窓会事務局長タイプ氏によるブリーフィング

我々アフターケアメンバーのブルネイ滞在中のお世話をして下さる、コーディネーターのノル氏 (Alumni) を交え、3日間のスケジュールについての資料を頂き、詳しい説明を受けた。

(2) JICA ブルネイ事務所

橋本所長より、“ブルネイ概要”“ブルネイ案内”等の資料を頂き、それらに沿ってブルネイ国に関する説明、諸問題等についてお話を伺った。特に、立憲君主制の政体特有の問題、石油・天然ガス資源に頼り過ぎていることから発する経済問題、フィリピン人などの外国人労働者に頼らざるを得ない労働事情等、この国ならではの問題点が多々あることを知ることができ、非常に興味深かった。

(3) ナショナル・スタジアム見学及び福祉青年スポーツ省主催昼食会

美しく近代的設備の整った国立競技場の、王室観覧室を特別に見せて頂きながら、10日後に迫るナショナル・デイに向けての国民の意気込みを伺った。このナショナル・デイは国を上げての盛大な行事らしく、事前に念入りの練習が行なわれるとのことである。又、地盤沈下等、同競技場の抱える問題点についても説明を受けた。

その後のナショナル・スタジアム内のレストランに於ける昼食会は、福祉青年スポーツ局長のアスマリー氏を中心に、橋本 JICA 所長、他を交え、「21世紀のための友情計画」についてのみならず、日本の政治・経済等にまで話が及ぶ有意義な懇談会となった。

(4) 大蔵省経済企画庁

アフターケアチームのブルネイ訪問の目的について、簡単な説明を行なった後、ムルニー氏よりブルネイ経済の現状 (国家予算、天然資源への依存度、経済開発5ヶ年計画等) についてお話を伺った。その後、同庁がコーディネイト業務を行なっているという、ブルネイ国内の各種設備、施設、建造物関係 (石油精製工場、空港、各種学校、住宅、道路等) についてスライドによる説明を受け、質疑応答を行なった。この質疑応答の中で、同省の組織及び業務内容についての説明も伺った。又、同庁では日本の経済企画庁同様、国内の諸事項に関する統計作成

業務も行っており、資料としてブルネイ国の統計白書を頂いた。

(5) 日本大使館

吉田大使公邸への表敬訪問においては、アフターケアプログラムの主旨及び、チームメンバー各自の「21世紀のための友情計画」への関わりについての説明の後、大使よりブルネイ国に関するお話を伺い、最後に、今後の当プログラムの活動に対する励ましのお言葉を頂いた。

(6) ヒストリー・センター

職員の詳しいレクチャーを受けながら、館内を見学した。歴代（初～29代）サルタンの系図、ブルネイ人の祖先に関する資料、王族の墓石、古代ブルネイの地理的資料等、ブルネイ国の成り立ちと歴史についての貴重かつ興味深い内容であった。見学後、館長との懇談会が行なわれたがこの方は第2次大戦中日本語の通訳をなさった経験があるため日本語が大変堪能で、懇談会も日本語で行なわれた。この為メンバーもリラックスでき、又館長のお話も、"歴史とは"について人類の原点であるアダムとイブまで戻って考える、大変スケールの大きい内容で、更に自分がこのヒストリー・センターをどのようにしてゆきたいかについても語られた。

(7) メカニカル・トレーニング・センター

校長のフセイン氏より、同センターの施設、業務内容・教育システム等につき、OHPによる説明を受けた後、施設見学及び質疑応答を行なった。同センターは一種の職業訓練校のようなものだが、新卒者もしくは勤労青年が、一定期間プログラムに沿ってセンターに通ってトレーニングを受け、それを就職先もしくは現職場で生かすというシステムになっている。校長をはじめとする職員の一部は、日本で数カ月～数年間研修をして技術取得をしており、又、日本からの技術者も派遣される（現在は帰国しているが）等により、教育内容は非常に質の高いものであり、卒業生の評判も極めていいという話であった。更に、同センターの施設（建物から実習作業場の教材に至るまで）は日本の三菱が提供しているということで、技術分野での日本とブルネイの結び付きを再確認した。

(8) ハンディー・クラフト・トレーニング・センター

ザニン氏によるトレーニングシステムについての説明を伺いながら、センター内の見学を行なった。ここでは手織物、銀細工、真ちゅう細工、木彫り等の伝統工芸技術取得の為のトレーニングが行なわれており、実際にこれらを製作しているところを見学したが、生徒は皆非常に熱心で、その技術も素晴らしいものであった。例えば、手織物の場合2年程で習得できるそうで、卒業後は各自が製作した工芸品を、国が買い取るというシステムになっているそうである。

● シンガポール

(1) JICA シンガポール事務所

星所長より、シンガポールに於ける JICA の活動についての説明の後、同国の現在迄の発展経過及び諸問題についてお話を伺った。シンガポールは現在先進国になろうとしており、その為海外からの技術移転に力を入れている。この点での日本に対する期待が大変大きいそうである。多民族国家であるがゆえ、外からのものを取り入れることに何ら抵抗はないが、逆に自国に対する執着も弱いらしく、政府は国民の"シンガポリアン"としての意識をいかに高めるかについて真剣に取り組んでいるとのことである。

(2) 日本大使館

長塚一等書記官との表敬訪問では、短い時間ではあったが、当アフターケアプログラムの目的とその期待結果、及びメンバー各自の国際交流活動への参加状況の説明を行なった。その後書記官より、シンガポールに於ける日本人の立場について、歴史的背景を交えてのお話を伺った。

(3) 外務省 ASEAN 局

局長 (Mr. TOH HOCK GHIM) より、シンガポールの「21世紀のための友情計画」の窓口である ASEAN 局の業務内容について説明を受けた後、質疑応答及び当プログラム改善に向けての意見交換が行なわれた。当事業は内容的にも真の国際交流として高い評価を受けてはいるが、まだまだ改善の余地があるということで、同局の意気込みを感じさせるものであった。

(4) 日本-シンガポール AI センター

石崎工学博士より、センターの概要 (業務内容、施設、教育システム等) 及び日本からの協力内容について OHP による説明を受けた後、質疑応答及び施設見学が行なわれた。日-シ共同の開発プロジェクトということで、センター職員にも日本人が多く、施設等もかなりの割合で日本からの協力が成されているということである。又、センター内は非常に整った職場環境で、国を支える技術開発は、優れた人材だけでなく整った職場環境があってこそと言わんばかりでありそういった方面に関して資金を惜しまない、シンガポール政府の姿勢が伺えるものであった。この点については、日本政府も見習うべきではないだろうかと思わずにはいられなかった。

施設見学においては、自動翻訳、地下鉄検索システム、医師用病名診断システム等、AI (人工知能) 活用の実演を見せて頂き、専門知識などないにもかかわらず、AI の有効性と将来性を認識せずにはいられなかった。

(5) 人民協会

初めに人民協会の活動紹介ビデオを見せて頂き、その後 Ms. ESTHER をはじめとする職員の方々と、質疑応答及び懇談会を行なった。この人民協会は、地域と住民を対象とした活動を中心とする、日本で言えば自治体の様なものであり、この様な組織を国レベルで持ち活動を行わせているというところが、多民族国家であるシンガポールならではの感じた。国の発展の為には国民の教育と、"シンガポリアン"としての意識の統一が重要であるという考え方で、先の星 JICA 所長のお話を思い出させた。

又、懇談会の後、帰国青年の職場を見学させて頂き、短い時間ながら意見交換を行なうことができた。日本側からの帰国青年に対する質問が主で、当プログラムに関するフィードバックを求める内容となった。

(6) 国家開発省

女性職員による RC (住民委員会) 活動に関するスライド説明の後、質疑応答を交えながら省内の施設見学及び説明を伺い、最後に Mr. LIM SAH SOON 及び帰国青年を交えて、当プログラム改善に向けての意見交換会を持った。RC 活動は、国民ひとりひとりの相互協会及び国家統一への意識向上を目的としており、その為活動もボランティアベースとなっている。内容は、前出の人民協会に通じるところがあり、大きな住宅地域毎に委員会を設け、住民相互の地域活動への協力・参加を求める活動を行なう。これは、中国系、マレー系、インド系等の多民族国家の社会的政策として必要不可欠なものであり、政府も大変力を入れているとの話であった。

省内の施設見学においては、大会議室、ボール・ルーム、チャイルド・ケア・センター等、業務上だけでなく、職員のレクリエーションや働く女性を助ける為の施設の充実ぶりを拝見した。そして、シンガポールに於ける女性の社会進出は、それを支える国としての意識と実際の政策があつてこそ、成り立っているのだということを痛感した。

● 同窓会青年との意見交換会における質問内容 (ブルネイ, 2月14日)

(1) ブルネイ側よりの質問

ア プログラム内容についての質問 (これからのプログラムに参加する青年より)

どんな所へ行くのか、スケジュール詳細は決まっているのか、等

イ 日本側が当プログラムの実施に多額のお金をかけていることについて、日本人としてどう思うか?

ウ アセアン混成グループのホームステイ時、異国人同士2名をひと家庭で受け入れできないか?

エ プルネイ青年に対し、どのような印象を持ったか？

オ ホームステイ時、各人の要求に応えた場所（例：コンピューター会社）へ連れて行ってもらえないか？

カ 日本での体験を自国へ持ち帰って実務に生かす為、ひとつの場所（工場、等）へ長く滞在し、じっくり学べないか？

(2) 日本側よりの質問

ア 日本でのホームステイをしてみてどう思ったか？

イ 日本滞在中に、何か困った事はなかったか？

2-2 帰国青年同窓会等の活動報告

第一訪問国のブルネイでは、文化青年スポーツ局勤務の Mr. Taib 氏が会長を勤め彼の人柄を反映してか同窓会組織活動等が積極的に見受けられた、同窓会のメンバーや本年度来日予定者との意見交換会では、本計画の継続と一層の友好促進をと帰国青年メンバーから、戦後の驚異的な経済発展を重点に見たいと来日予定者メンバーより意見を頂き、本計画に益々の期待と希望を持っているようであった。

第二訪問国のシンガポールでは、到着日の夜会長以下 SAJAPA のメンバーの歓迎会の招待を受けた折に同窓会の詳細な活動報告を伺った、現在の SAJAPA メンバーは本計画当初の帰国青年が主で近年の参加のメンバーが同窓会加入率が大変低く、加入率を向上する事が当面の課題との事であった。本計画に対する要望はブルネイ同様一層の友好促進と本計画の継続があると多数の意見を頂戴する。

なお両国とも滞在中、様々な有形無形の配慮で快適な滞在を出来たことも両国同窓会メンバー一同のお陰と深く感謝を申し上げたい。



2-3 セミナー・交流会と思われるものは両国とも実施せず。

2-4 ホームステイ実施状況

〔ホームステイ名簿〕

- 斉藤 孝司 : Haji Mohd Noor Bin Haji Salleh (公務員)
川副 靖 : ノルハヤティ (福祉青年スポーツ局)
丸山 実 : Shahrom Azahar Bin Haji Suhaimi (公務員)
青山 節子 : Masri Hj. Gatang (農務省)
峯岸 恵美子 : Hjh Halimah bt. Hj Ahmad (農務省)

3. 訪問国における青少年団体の活動状況

人民協会で到着早々日本語による活動紹介ビデオを見たのは当メンバーびっくり仰天、何と心憎い配慮で有ろう。おもな活動は多民族国家統一(マレー系・インド系・アラブ系・中国系)を目指すシンガポール国家の社会開発・社会教育等に関して地域住民サービスや住民参加の行事・地域の福祉活動等を行っている。日本では該当する団体もしくは行政機関もな

く、各市町村レベルで行うことを国家レベルで統一指導している印象を受けた。

4. 招聘事業に対する両国の評価

両国ともに本計画事業への期待は大きい、おそらく招聘国全部に共通していると思うが継続と益々の発展を切望する意見が大であり、活字情報で知りえない生活体験が高い評価の要因と思われる。また帰国青年同志のつながりを強化し、再交流活動が活発になれば二次的な成果も生まれる事も両国で感じ得た評価である。

5. 調査チーム参加者の感想

「アフターケア調査団に参加して」 峯岸 恵美子

①“人を指差す時には親指で”“子供の頭はなでないこと”・・・ブルネイに向かう飛行機の中、予想外の時間に出された機内食に驚きながら、私はブルネイに関する資料を必死で読みあさっていた。“今夜のうちに、私達はブルネイ・ダルサラーム国に到着し、そこからアフターケア調査が始まるんだ・・・。”私は、シンガポールの勤労青年グループの合宿セミナーに参加したことが、唯一の国際交流経験であり、ブルネイという国についての知識は皆無に等しかった為、不安もひとしおだった。特に、この国はイスラム教を国教としており、気を付けなければならない習慣の違いがあるということを伺っていたので、どうしても緊張を隠せなかった。だが、そんな不安と緊張も、真夜中に空港まで出迎えて下さった、タイプ氏をはじめとする同窓会（Alumni）のメンバーの方々と会ったとたん、嘘のように消えていった。“この国の人達は、あたたかいな。”というのが、ブルネイに対する第一印象であった。

美しい自然と、どことなくのんびりした街の風景に酔いしれる暇もないほど、翌日からのスケジュールは、非常に中身の濃いハードなものであった。だが、ノル氏や他の同窓会青年の方々の、非常に心配りの行き届いたアテンドのおかげで、辛さが随分和らいだ気がした。食事といえば、我々が食べ易いようにと中華料理を選んで下さったり、フリータイムが少しでもあれば、市内観光に連れて行こうとして下さったり、まさに至れり尽くせり、といった感じであった。又、自分たちの国、“ブルネイ・ダルサラーム”をもっともっと知って欲しいという気持ちや、青年達みんなから感じられ、国全体としての国際交流に対する意欲的な姿勢を、かいま見たような気がした。

ホストファミリーのアリマーさんは、小柄な女性で、今年の10月に結婚するという話。お相手は、アリマーさんと同じくこの「21世紀のための友情計画」に参加した青年で、ホーム

ステイの間ふたりそろって私のお相手をしてくれた。ブルネイ博物館、マレイ・テクノロジー博物館見学の後、自宅にミニ動物園を持っているという友人のお宅へ連れて行ってあげたのだが、はたしてそこには、200ぴきのうさぎをはじめ、猿に、七面鳥に、鶏に・・・本当に、ミニ動物園だった！私は動物好きなのでとても楽しいひとときを持つことができたのである。その後、八百半デパートにつれて行ってあげたり、次の日仕事があるというのに夜遅くまで気をつけて頂き、それこそこちらが申し訳なく思うほどだった。翌朝は、自分の職場へ私を連れて行ってあげ、そのカフェテリアで朝ごはんをごちそうしてあげた。午後3時頃から翌日の朝8過ぎまでという短い時間ではあったが、ブルネイ家庭の様子を実際に見ることができ、とても有意義なホームステイであったと思う。又、彼女からの沢山のお土産の中でも、“フェアウェルパーティーで着るように”と頂いたドレスは、私の宝物になりそうである。

この国は、石油と天然ガスのおかげで裕福なのだと、多くの人から聞いていた。国民も皆それを承知で、それなりの生活を営んでおり、そのせいなのだろうか、国全体に一種独特ののんびりしたムードが漂っている気がした。我々として、国中全部を見てまわったわけではないので、一概には言えないかもしれないが、街はどこも良く整備されており、住宅も皆ある程度以上のきれいさで、いわゆるスラム街のような雰囲気を持つところが全くない。自動車の普及率も高く、ひとりで2～3台所有している人も稀ではないという話だ。しかしながら、生活の端々にどこか裕福になりきれない一面が見られ、それが何ともミスマッチな雰囲気であった。例えば、家はとても広く、リビングやダイニングはとても美しいのに、風呂場やトイレに入るとまるで違う家のような気がするところなど・・・その国独自の習慣（お風呂は、水のシャワーだけで済みます）や考え方のせいもあるのかもしれないが、そういう普段見えないところに手間暇かけて贅沢をしてこそ、本当の裕福といえるのではないかな、という気がした。だからというわけではないが、国民ひとりひとりが現状の生活に満足せずに、“もしも石油が枯渇したら”を頭に置き、国の将来について真剣に考えてゆかなければならないのでは、という気がした。又、国民の口からは一度も聞かなかったが（聞かなくて当たり前なのだろうが）、立憲君主制の政体ならではの悩みもあるそうで、まだまだ解決しなければならない課題は多いようである。

どんな場所へ行っても、必ず国王と王妃の写真が飾られている国。観光化されておらず、手付かずの自然がいっぱいの国。国民が国の平和をモットーに、時の流れに逆らわずに自然体で暮らしている国・・・ブルネイ・ダルサラーム国は、私の目にはそんなふうに映った。“もしもまたブルネイに来るのなら、ぜひ10月に来て、私たちの結婚式に出てね！”というアリマーさんの言葉に、心グラグラしながらこの国をあとにした。

②ブルネイからの飛行機で2時間ほどで、全く対照的な国、シンガポールに着いた。とに

かく、整然とした街並。どこもかしこもきれいで、“よくできてるなあ”と思わずにはいられなかった。“ゴミを捨ててもタバコを捨てても罰金”という、政府の厳しい指導の賜物だと実感したが、この国の人に言わせると、どこの国でもそういった法律はあるはずで、どれだけ厳しく取り締まっているかの違いだとのこと。でも、日本ではこうはいかないだろうと、日本人として少しなさけない気がした。我々の泊まったウェスティン・スタンフォードホテルは、ホテルとしては世界一のつぼの73階建てで、観光にもってこいのロケーションであった。まわりに見える高層ビル街などは、まるで新宿のようであり、ブルネイと比較すると非常に近代的な印象が強い。そして、そのような国に住む人々はやはり近代的で、ブルネイの人達のようなのんびりしたところがなく、みな現実派のようだった。この国でのスケジュールは、ブルネイに比べるとゆったりしており、現地 JICA の方の配慮を大変うれしく思った。星 JICA 所長から、シンガポールに関する興味深いお話を伺い、実質5日間の滞在にあたり、気持ちが引き締まるのと同時に期待が高まるのを感じた。

シンガポールでは、SAJafa という同窓会が活発な活動を行っており、メンバーの青年達とも交流をはかったが、ひとつだけ残念なことは、帰国青年全員が必ずしも同窓会に入るわけではないということである。その為、同窓会との意見交換会等では、自分が日本で実際に交流した青年達の顔を見ることができず、さみしく思った。しかし、彼等とは現地で連絡をとって、再交流の機会を持つことができた。もちろん、再会した時の感動と云ったら、言葉にできないくらいである。懐かしい顔、顔、顔！お互いに“*I'm glad to see you!*” “*Nice to see you!*”を言い合い、握手をし・・・そして彼等は我々のシンガポール滞在中、平日にもかわらぬもなく毎日、必ず誰かがアテンドしてくれ、わずかなフリータイムをフルに使って、夜遅くまでのセントーサ島観光をはじめ、バード・パークやショッピングの案内までしてくれた。特に、中国正月の最中に行けた為、華やかなデコレーションを見ることができた中国人街、そしてそこでごちそうになったドリアンの味は、私の中に強い印象を残している。帰国前日のフェアウェルパーティにいたっては、合宿セミナーで会った青年のほぼ全員が顔を出してくれ、話に花が咲き、“これが国際交流だ！”と、感動もひとしおであった。

表敬訪問等実際のアフターケア調査活動を行っている時にはそんなに意識しなかったが MRT の注意書きや、銅像に添えてある説明などが4カ国語になっているのを見て、多民族国家であるシンガポールを感じた。中国系、マレー系、インド系・・・それぞれ独自の生活習慣、文化を持った人達がひとつの国の国民として暮らしているわけで、だからこそ、この国独自の悩みごとと、それに対する政府の努力がある。

この国は先進国を目指しており、その為海外からの技術移転に余念がない。多民族国家である為、外からのものを取り入れることには何ら抵抗がないが、それと同時に、自国に対する執

着心も弱いそうで、そこが国としての大きな問題になっているらしい。そこで、国民の“シンガポリアン”意識を高め、民族を越えた相互協力による国家統一をはかる為、あらゆる政策がとられているようだ。又、女性の社会進出を国家で奨励した結果として、日本と同じく“結婚・出産率の低下”という問題も抱えている。確かにシンガポールは女性にとって働き易い国だと、同じ働く女性目から見て感じた。チャイルドケアセンターなどの施設も充実しているし、共働きの夫婦が多い為、夜遅くまで開いているショッピングセンターやレストランが多い。“仕事の後で妻が料理をするのが大変だから、この国の人たちは外食することが多い。”ホームビジット先のゴー夫婦は、ふたりそろって、あたりまえのようにそう説明してくれた。それを見ながら、“こんな理屈、日本じゃ”甘い!“でかたづけられちゃうんだらうなあ・・・”と、シンガポールの働く女性を羨ましく思ったのは、私が料理が苦手なせいだけではないと思う(思いたい!)。ところでこのゴー夫婦は、当プログラムへの参加がきっかけで知り合っており(公務員グループの、リーダーとサブリーダーだったようだ)、同じグループで同じように結婚したカップルがあと3組ほどいるそうで、この「21世紀のための友情計画」の別の面での効果を知ることができた。この“マッチメーカー”的効果は、結婚・出産率の低下しているシンガポールでは、特に有効なのでは、と思った。

国中が美しく、分かり易く、安全で、英語が通じる、海外旅行初心者にもってこいなような国、シンガポール。そしてもちろん、あまりにも有名な、ショッピング天国・・・帰国後、新婚旅行先の第一候補がシンガポールだという友人に、現地で集めまくった観光案内関係のパンフレットを渡しながら、“絶対行きなね!”と、私。そういう自分も、今度はぜひ観光目的で行きたいと、真剣に考えている。青年達と別れ際に交わした言葉、“See you again!”を、また実行したいものだ。

最後に、今回のアフターケア調査団参加に際し、ブルネイで、シンガポールで、そして日本でお世話になった関係者の方々、並びに、ご理解ご指導ご協力くださった全ての方々に、心より感謝申し上げます。



「アフターケア調査団参加感想文」 丸山 実

どこからともなく、お祈りを呼びかける声が、呻くようにスピーカーから流れてきて目を覚まされた。薄暗いホテルの部屋のカーテンを開けると、外には日本製の自動車がまばらに通っている。公園に何本か植えられているヤシの木を除けば、異国にいるとは感じられない。窓を開けて生暖かい空気に触れて、ここは紛れもなく熱帯の国だと感じる。

「ブルネイってどこだったかな。」と1年ほど前に世界地図で確認したことが懐かしく思い出される。昨年10月の受入れの際ブルネイ青年を見送った後、こうも早く絵葉書と写真の中だけの世界が現実となったとは、この2カ月間というものには彼らとの再会と、未知の国への関心がはじけそうになるのを抑えるのが大変だった。

深夜のバンドル・スリ・ブガワンの空港で、懐かしいシャフロムさんの顔を見つけた時、少々はあった不安もなくなってしまった。私も含め数多くの人が、何度も彼から手紙をもらって感心しており、彼は「21世紀のための友情計画」の趣旨を真に理解し、実行している人であると言える。

余り大きな国でないとはいえ、実質3日間滞在しただけですべてを語ることはできないが、実に行き届いたプログラムを組んでいただいたおかげで、大まかなブルネイの全体像をつかむことができた。JICA 事務所、日本大使館、経済企画庁訪問でブルネイの経済的、政治的

状況について学ぶことができた。また、ブルネイ歴史センターではブルネイの歴史の最近の研究成果を聞かせていただき、大変興味深かった。

ナショナルスタジアムで開かれた「21世紀のための友情計画」の影響及び将来についてのセミナーでは、ホームステイや合宿セミナーの評価が非常に高かった。地方プログラムの担当者として、ホームステイにおける工夫を続けていかなければならないと感じた。また、友情交流だけにとどまらず、短時間でもいいから自分の専門分野について学びたいという意見も参考にしたいと思った。

私のホームステイ先は、期待していたとおり、昨年津山市を訪れており、また合宿セミナーで同室だったシャフロムさんのお宅であった。写真で見せてもらっていたお父さん、何人かのお兄さん、お姉さん、弟（11人兄弟）たちに会い、歓迎してもらった。何人かの既婚、未婚の兄弟姉妹といっしょに住んでいたが、兄弟だけで集まって住むということは日本では珍しいことではないだろうか。日本とは違う家族のつながりの強さを感じた。夕方には、昨年津山市を訪ねたメンバー9人のうち6人が私のために集まってくれ、マレー料理のレストランで夕食をともにした。1人また1人と集まって来た青年たちとの再会が何よりも嬉しい瞬間だった。元気そうな彼らの顔を見ていると、津山市でお世話した時のことが昨日のこのように思い出された。ホームステイの翌朝はシャフロムさんの勤める都市・地方開発局に案内してもらった。若いながらかなりの責任を持たされて仕事をしているシャフロムさんが頼もしく見えた。ブルネイでのスケジュールは、きつい面もあったが実によく配慮されており、同窓会員のつきっきりのお世話もあり、至れり尽くせりで感心した。

シンガポールでは多少不安を持って臨まなければならなかった。中国及びブルネイの青年招聘事業においては、地方プログラム受入れ及び合宿セミナー参加の経験があったが、シンガポール青年とは直接の関わりを持っていないからだ。最初の晩 SAJAPA の会員との意見交換・懇談会においても、やはりブルネイにいた時とは調子が違ったが、それも最初だけだった。ブルネイに比べてあまりきつくないスケジュールも、私にとってはありがたかった。

「知っているようであまり知っていなかった」というのが、シンガポールで一番感じたことだった。JICA 事務所、日本大使館、外務省、人民協会、国家開発省等の訪問でこの国の政治・経済・文化、歴史等についていろいろな側面から教えていただき大変有益だった。また、人民協会、国家開発省では帰国青年の職場を見学し、話をすることができた。彼らが日本での楽しい経験を嬉しそうに語り、生き生きと働いている様子を見るにつけ、今後も青年招聘事業が続いていくことを願わずにはいられなかった。

ホームビジットは、SAJAPA 会長のクリストファー・チャン氏のお宅に、川副・青山団員と一緒に遊びました。彼の家は国民の80パーセント以上が住んでいるという高層のビルの

ビル群の中の1つにあったが、2階続きで内装も非常にきれいで、内部は一戸建ての住宅と変わらない感じであった。

公式日程以外には、昨年勤労青年グループとして参加した青年たちがつきっきりで世話をしてくれた。斉藤団長、川副・峯岸団員は日本で交流している人であったが、私は面識がなかったので初めは恐縮したが、彼らの好意に甘えることにした。今思えば、公式行事のような堅苦しさをないつき合いができ、シンガポール青年を知る良い機会だった。彼らの案内してくれたセントーサ島にあるシンガポール史の博物館では、第2次世界大戦中の記録が多く展示してあったが、日本に関係するところはいたたまれない空間だった。複雑な気持ちで記録写真に見入る私に「過去のことだ。」とある青年が行ってくれたので、救われたような気持ちだった。

シンガポールでは、期待していた以上に多くのシンガポール人と知り合い、多くのことを学ぶことができた。シンガポール人と出会ったことのなかった私にとっては大きな収穫であり、今後シンガポール青年の受入れをする際に役立つことだろう。

日本に帰り、新幹線で東京から岡山へ向かう途中、日本という国の大きさをひしひしと感じた。何時間も高速の乗り物で移動しても、そこには日本語だけを話す膨大な人口があり、その熱狂的な労働によって築きあげられた経済的成功の証がある。これらのものがいかにあの小さな国々の人たちにとって大きく見えたことだろう。これは、彼らの国を訪れて初めて気がつくことだ。彼らのことを知るだけでなく、自分の存在をも正しく認識していないと、彼らの気持ちを正しく理解することはできないと思った。

今回アフターケア調査団に加わり、ブルネイ及びシンガポールを訪れることができたおかげで、私のアジア諸国に対する関心は非常に高まり、「21世紀のための友情計画」受入れの意欲も大いに盛り上がった。再交流ができ、自分の目で相手の国を見ることができるこのプログラムが、いかに重要なものか強調しておきたい。津山市では民間団体とともに「津山とアジアを結ぶ会」を結成し、青年の受入れを行ってきているが、今回のような訪問によってお互いを結ぶ絆がより堅くなっていくことを確信する。より多くの人がこのような体験の機会を持てるよう願う。最後になったが、JICAの皆様、受入れ国の同窓会、関係諸機関、及び快く送り出してくださった職場の皆様に対し心よりお礼申しあげる。

「アフターケアチームに参加して」 青山節子

①はじめに

ある日突然、電話にてこの「アフターケアプログラム」に参加しないかと連絡を受けた。いったいどのような事業なのか、また参加するにしても勤務先の許可がでるだろうか、そし

て、語学力不足やこの事業の責任を果たせるかどうかなどと、不安を抱きながらの日々が過ぎた。

せっかく与えられたチャンスなのだからと思い、今後、国際交流活動や地域活動を行う上でなんらかのヒントが得られるのではないかと思い、思い切って参加することにした。

私の所属するボランティア団体「島根県国際交流青友会」はこ「21世紀のための友情計画」が行われた1984年当初から、この事業に「地方実施協力団体」として参画している。

都会から離れたこの地においては、数年前まではなかなか外国の方々とはふれあう機会が少なかったが、この事業によって国際交流の大切さを学び、友好、親善に多大な功績となっている。また、それぞれの地域の中で地元住民の国際化への理解が深まったと思っている。そして、21世紀を担う子ども達へも学校訪問交流やホームステイ交流をとうし、国際理解へとつながっていると思う。

私たちの団体「青友会」においては、より友情と訪問国への理解を深める意味で「インターシマね友好の翼」と称し、この「21世紀のための友情計画」で来県した国の青年を訪ねる事業を実施している。今回、私にとってはこの意味も含め「ブルネイ、シンガポールへの訪問」に期待もあった。

②再会

2月12日現地時間での深夜11時30分、近くて遠い未知の国ブルネイ・バンダル・ブガワン国際空港へ到着した。不安な気持ちと出会いの楽しみが交錯する中、入国手続きを済ませ一歩踏み出してみれば、なんと深夜にもかかわらず、橋本 JICA ブルネイ所長をはじめ同好会メンバーの出迎えを受けた。その国を訪問した時に待っている人がいるということは、どことなくほっとし安心することが出来る。この気持ちは私たちが外国青年を受け入れる時にも同じことがいえよう。その出迎えの中に一人の懐かしい青年の顔があった。1986年「21世紀のための友情計画」で県に受け入れたブルネイ青年のメンバーの一人だった。今までの緊張が嘘のように解きほぐれていくのを感じた。

私の友人の一人がブルネイ青年へ手紙を出し、このプログラムが実施されることを通知していたのだ。友情計画のつながりに感激し、この事業の成果をみたような気がした。日本とは一時間の時差があるブルネイで、深夜に及ぶ行動の中でまずは心地良い一夜が過ぎていった。

イスラム教国ブルネイ。早朝のコーランの響きでの目覚め。独特な気候や風土、食事の心配とこれからの私達の行動に、多少の不安をいただきながら公式行事へと入っていった。

③国から人へ、そして個へと

今回のプログラムの中でホームステイを経験したが、この国を、この国の人を理解するためには欠かせないことだと痛感した。子どもの食事場面でもきちんと食事をしないとその両親は口やかましく食べなさいと言う。あいさつもきちんと行っていた。就寝の前に子どもを

抱き締めるしつけなど、もちろんその国の文化に応じての行動ではあるが、言い替えば私たち日本を理解することにもつながる。こういったことは実際に相手の国の生活の中に入っていかなければわからないことである。かまえるのではなく「ありのまま」受け入れることの大切さを、つくづく感じた。このことは「国」ではなく、一人の人間として、いや「個」として作りあげていかなければならないことだろうと思う。

4泊5日のブルネイ滞在。続いてシンガポール訪問へと日程は移り、ハードではあったがスケジュールも後半へと入っていったある時、受入れ団体のシンガポール青年の勤務する職場へ偶然訪問する機会があった。その時の上司の言葉が印象に残っている。

「このようにわざわざ日本からきているのだから良くしてあげるように」と部下であるその青年に言っていた。形式にとられるのではなく、心暖まる言葉に感謝し、国を越え、民族を越えた素晴らしい交流に感激した。

④おわりに

シンガポールでも受入れ団体である同窓会組織がしっかりしており、その一人一人のメンバーにお世話になり、英会話が不十分な私に、つきっきりでサポートしていただいた青年の気配りに感謝し、人と人との出会いとつながりを大切に、これからの活動に活かしていきたいと思う。

10日間の日程も無事終わり、シンガポール・チャンギ国際空港を後にした。

職場の理解と、参加者のみなさまに助けられ多くのことを学び貴重な体験となった。

こうして「21世紀のための友情計画」は、いままでに大勢の外国の青年たちを日本に受入れ、そして、アフターケアプログラムにおいて相互交流となり、このことは21世紀に向け友情と信頼が深まって行くことを確信することが出来た。

暖かかったブルネイ、シンガポールの国々。成田に着き帰国の一報を鳥根の友人に入れた。「こっちは雪が積もって、真っ白になっているヨ」という声に、帰って来た安堵感とその地のぬくもりを残したまま日本の地を踏み締めていた。

「アフターケア調査団参加観察記」 川副 靖

「ブルネイってどこにある国だっけ？」

私がアフターケア調査団の一員としてブルネイとシンガポールに行く、と学生時代の友人に話をしたときの彼からの第一声がこの言葉であった。

ここ数年のうちに、日本では国際化の波とともに、海外からの様々な情報が飛び交い、それに呼応したマスメディアや旅行会社のプロモーションもあって、毎年何十万人もの人々が海外に行くようになった。しかしながら、ほとんどの人々の目的は観光であり、それも渡航

先は欧米など先進国が中心となっていることは周知の通りである。私の友人が示した反応は、国際化が進んだと言われる今の日本の標準的な反応であったと思われる。シンガポールについては政府の観光政策もあって我々にとって非常に身近な国になってきている。一方、我々の消費生活のベースであるエネルギーの面で大変関連の深いブルネイという国について、知識を持ち合わせている人は皆無に近い。

ここでは、そんな近くて遠い国、ブルネイの生活に焦点をあて、実際のホームステイを通して観察できたこと、感じられたことを伝えたい。

① ホームステイ先のプロフィール

私がお世話になったノルハヤティ家は14人家族という大所帯で、親世帯と兄弟世帯が揃って暮らしており、日本とは全く異なった家庭像が形成されている。ロイヤルファミリーの系統ということもあって、生活レベルはブルネイの中でも上流に位置するのかもしれない。父親は、「21世紀のための友情計画」の窓口である福祉青年スポーツ局に勤務し、日本に対する関心が非常に高い方である。

② 白いコテージ

我々が宿泊したアングスホテルから車で約15分。南国の豊かな自然と陽光とが調和した鮮やかな街並みが広がり始めた。「さあ、あそこが家だよ！」とティーンが指差した方向をみると、童話にでも出てきそうな真っ白な邸宅。300坪以上もあろうかと思われる庭には原色そのものの花が咲き乱れ、日本製のスポーツタイプの車3台が所在無げに寝そべっている。この光景を見た瞬間、ホストファミリーのために買ってきた手土産が鞆の中で「シュン」と音をたてて縮んだような錯覚を覚えた。

③ 歓迎

玄関のドアをそーと開け、脱いだ靴と靴下を抱えながら不安げに顔を覗かせた私を迎えてくれたのは、ティーティン（18才）、ハーサン（20才）、サンリー（12才）、マス（7才）、ヤン（22才）の5人であった。

彼等の第一声、「こーんにち、うわ！」。

私のはじめの挨拶、「Selamat patang（こんにちは）」。

お互いのあまりの発音の悪さに、顔を見合わせての大爆笑。落ち着いてみると、ティーティンの手には重そうな日本語の本が抱えられている。人の暖かみが感じられる何よりも嬉しい歓迎であった。

④ カンボンアイル（水上部落）の子供達

ドリアンの強烈な匂いとボートの焼けたオイルの臭いが混ざったオープンマーケットを横目に、私とティーン、ティーティン、マスの4人はブルネイの象徴である水上部落に向かった。水上部落では彼らのおじさんが雑貨屋を開いており、そこに遊びに行くのである。ボー

トから降りて、さあ歩こうと足を踏み出した瞬間、「バキッ」という嫌な音がした。よく見るとそこらじゅうの木が腐り始めている。立ち止まった私の横を、小さな子供達が走り抜けて行く。そして、見た目で80キロ近くもありそうなおばさんが軽快な足取りで渡っていく。ここでの生活は彼らにとってけっして不便なものではないのである。学校も水上に建てられ、校庭などはまったくない。子供達は、狭い橋の上で自転車に乗り、追いかっこをしている。我々の生活の判断基準とは違った、心の豊かさのようなものがここでは息づいている。

「水は我々のふるさとだ」と言い切ったおじさんの言葉が心に響く。

⑤ ゲームボーイ

ノルハヤティ家のリビングで大きな顔しているのは日本からきたゲームボーイという機械である。なんでも、朝の5時ぐらいから夜の1時ぐらいまでフル稼働だそうである。画面の中に出てくる登場人物は、英語ではなくはっきりとした日本語をしゃべっている。娯楽の少ないブルネイではこの遊びがトレンドイダそうである。買物に出掛けた八百半にもソフトがところ狭しと並んでいた。朝の4時にコーランのしらべと共に祈りを捧げる敬けんな国ブルネイ。昔ながらの文化に無理やり低俗な文明が入り込んできているような違和感を感じたのは私だけであろうか。

⑥ ココナッツ・ウォーター

夜の10時ぐらいから賑うオープンマーケット。そこには様々な食の出店がある。日本風に表現すると、焼き鳥、ガラスープ、ハンバーガー、焼きそば、などなど。1ドル(約80円)のココナッツウォーターが金魚すくいのビニール袋のようなものに入れて売られている。若者はそれを片手にそれぞれの会話を楽しむ。ここでは、会話こそがメインディッシュであり、食べ物は前菜のようなものである。ココナッツウォーターの甘さがいっそう会話を弾ませる。

ブルネイでの短いホームステイは私に多くのことを考えさせる機会を与えてくれた。

今の私たちは会社という看板を背負って、効率や効果を求めて彷徨している。自己紹介をするのにまず会社での業務を説明する。酒を飲んで上司の話をする。決して悪いことではないと思う。しかし、何かが足りないように思えてならない。

ブルネイでの生活経験から感じられた「豊かさ」について、ブルネイの人々のあたたかさについて、そして生き方について、語り合ってみたい。できるかぎり多くの人と。

このような素晴らしい機会を与えてくださったすべての方々に深く感謝申し上げる次第である。

6. 提言

ブルネイ滞在は3日間と短く、多忙な中にブルネイ側の適切且つ非常に熱心な対応で我々

一同無事終了したことを、先ず深く感謝を申し上げたい。

特筆すべきことは、受入れ窓口担当者の同窓会会長 Mr.TAIB 氏による配慮の行き届いた日程で、各関係機関を含め我々の趣旨を充分考慮され、政治・経済・生活文化等をバランスよく組立てあった。

また最も有意義だった同窓会の帰国青年との意見交換会は帰国青年のみならず、1992年度来日予定の青年も参加し、来日時における不安と期待の入り交じった斬新な意見質問等を伺えた事は実務担当者として非常に参考になった。今後とも本「友情計画」にかけるブルネイ側の意気込みを痛感した3日間であった。

シンガポールでの5日間は、余裕のある日程で密度の濃い訪問先を選定して頂いた。特に同国の文化・習慣、教育等を知るうえでシンガポール人民協会の訪問は大変有意義であり、同国での多民族国家の統一と発展に欠かせない問題点を知る得た事は、今後のプログラム作成に参考に成り得ると思う。

両国とも共通の問題点は一方通行になりがちな「友情計画」を、当訪問団のように5名単位で1年1度でなく、各分野で接した多くの日本青年との再交流を希望しており、当方も返答に躊躇しつつ、その熱意は充分感じられた。

ブルネイ・シンガポール2ヶ国10日間での訪問は、ホームステイ・意見交歓会・官民施設訪問等の日程が過密に成り、特にブルネイでは2泊のホームステイを希望する上で少なくとも5日間の滞在を要請された。今後両国の訪問においては12日間位が適当と思われ各関係機関にいま一度滞在日程等を再考して頂きたい。

最後に、滞在中は無論のこと訪問準備段階から各関係機関、両国 JICA 事務所等に多大なご協力を頂き深く感謝を申し上げたい。特に両 JICA 事務所には当方の我儘快く聞いて頂き、団員一同此の紙面を得て御礼申し上げます。

インドネシア

平成4年3月9日～3月18日

財団法人 日本ユースホステル協会

1. 調査チーム派遣概要

1-1 調査チームの構成

	氏名	生年月日	性別	住所・所属
チームリーダー	田中清隆	S20.02.17	M	埼玉県春日部市豊町2-2-7 (財)日本ユースホステル協会
メンバー	大城勝博	S31.02.23	M	沖縄県読谷村字高志保58 沖縄県総務部知事公室 国際交流課
メンバー	吉武真紀	S40.08.25	F	京都府京都市西京区川島寺田 町7-3 (財)京都ユースホステル協会
メンバー	仲瀬慎子	S43.04.27	F	京都府京都市左京区松ヶ崎 東桜木町26 (財)京都ユースホステル協会 国際奉仕団員

1-2 調査日程

3月9日(月)

午後日本ユースホステル協会に、今回のメンバー5名のうち、リーダーの田中清隆、メンバーの吉武真紀、仲瀬慎子の3名が集合(1名は都合で中止。1名は、成田空港に直行)

16時、JICAの青年招へい業務室の伊藤勲室長にあいさつ。

室長より、出発に先立って、いろいろなアドバイスをいただく。

3月10日(火)

9時新東京国際空港(成田)にて、もう一人のメンバー大城勝博合流、全員がそろろう。

11時20分定刻GA873便は、ジャカルタへ向け離陸。

16時45分ジャカルタ(スカルノハツタ空港着。JICA手配のミートサービスに案内され、プレジデントホテルへ)

ジャカルタは、まだ雨期が残っているのか、小雨が降っていた。

夕食は、沖縄のプログラムに参加した青年の案内で、街に出て夕食

3月11日(水)

● JICA 訪問

9時、JICAインドネシア事務所訪問。担当の椎名のり子所員、アシスタントのレニーさんとスケジュールの確認

9時45分高橋昭所長を訪問、JICAのインドネシアにおける仕事について伺う。

● 日本大使館訪問

10時35分日本大使館到着(この時、おもしろかったのは、JICAと大使館は、すぐ向いに面しているのに、一方通行や渋滞の為、車で20分もかかってしまった。と云っても、この交通事情、歩いて渡るのは危険)

大使館では、一等書記官の畠薫氏を表敬。

11時30分一旦ホテルへ戻った後、ユースホステル協会の職員である田中、吉武は、インドネシアユース・ホステル協会の役員(青年スポーツ省MENPORA大臣第3補佐官)表敬及び、市内のユースホステルを見学に出発。大城、仲瀬は、市内見学へ。

● 交流パーティー（プレジデントホテルにて）

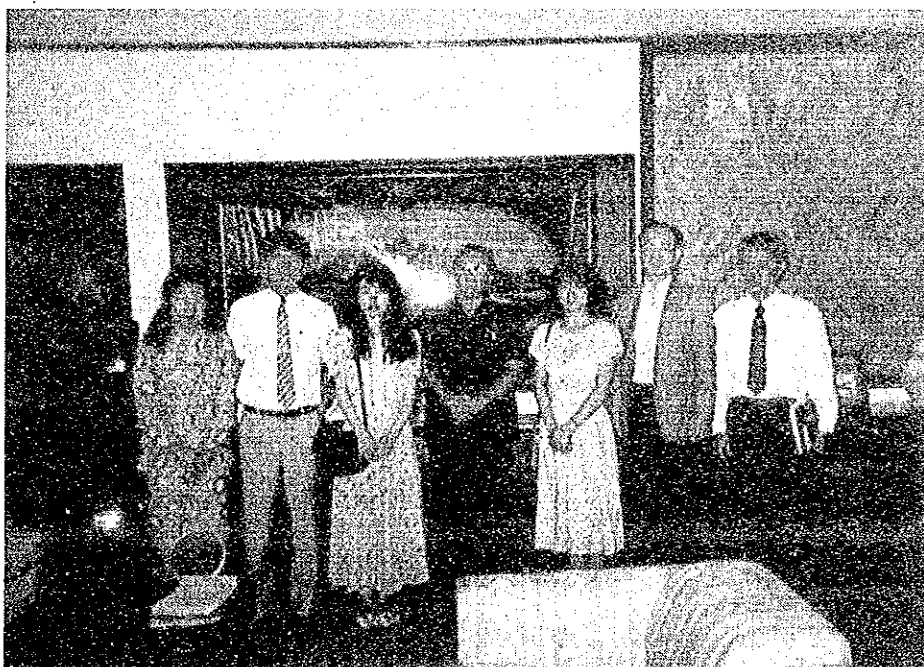
JICA 高橋所長，青年・スポーツ省（MENPORA BUDI PRAYITNO）大臣第4補佐官，田中リーダーのあいさつの後，歓談。ほとんどの人が初対面なのに，古い友達のように，とても楽しく打ち解けてお話しすることが出来た。

3月12日（木）

● 青年スポーツ大臣表敬

10時に MENPORA の予定が，9時35分に到着，大臣表敬のためしばらく，控室で待機。

10時 MENPORA 大臣 AKBAR TANJUNG 氏を表敬。話がのり，予定を大巾に越してしまう。



● 第1回インドネシア・青年招へい同窓会（KAPPIJA）とのセミナー

10時30分から予定していた KAPPIJA とのディスカッションは，20分おくれてスタート。

KAPPIJA は会長をはじめ約20名が出席。

ホームステイの思い出や，KAPPIJA の活動についてディスカッション

● 青年協議会（KNPI）訪問

13時 KNPI 訪問。ここでは，どこでズレたのか，我々は13時，KNPI では14時となって

おり1時間のズレがあり、その時間を利用して、館内を見せていただく。

15時ごろ、KNPI との話を終り、田中と吉武は、TAMA MINE 公園内にあるユースホテルへ、大城・仲瀬は KAPPIJA のメンバーと会うため、ホテルへ渡る。

3月13日(金)

● 青年海外協力隊員活動現場訪問

午前中、バスで1時間ほどはなれた、リハビリセンター「Bambu Apus」を訪問。ここは視聴覚障害児の為のリハビリセンターで、平成2年3月より、越田美代子隊員が活動している。

15時第2回 KAPPIJA とのセミナー

昨日に続き約2時間30分に渡りディスカッション。

終了後、我々は、ここで大変珍しい行事(?)に参加することが出来た。

訪問した時が、ちょうどイスラム教のラマダン(断食)で、イスラム教徒はその期間、日中は、一切のものを口にしない。そのかわり、夕方6時ごろに、イスラム寺院のスピーカーから、ラマダンを終了との(合図)が流れると、それを合図に、役所のホールでは、一つのお祝い行事として、簡単な食事が用意される。それに、BuDi Prayitno 補佐官の案内で出席させていただき、役所の皆さんと一堂に会し、会食をする機会を与えられた。

但し、大変残念だったのは、チームの一人仲瀬が発熱し1日床につき、JICAの椎名さん、レニーさんのお世話になってしまったが、お2人の手配で医師の診察をお願いしたおかげで翌日には全快した。

余談だが、この先生、日本医学を学び、日本語を話せる BESAR (『大きい』という意味) という名の小柄な先生。しかし、外国で体調をくずした時など、日本語を話せる先生は全く大きな力になってくれる。

3月14日(土)

10時仲瀬が全快し全員で、ジャカルタよりジョクジャカルタへ

ジョクジャカルタ空港には、本年度参加した、YASINTA (シンタ) (ASEAN 混成学生グループ) さん達6名が迎えてくれた。

3台の自動車に分乗し、皆で王宮、水宮を見学した後、彼らが手配してくれた昼食を取った。私達が食べ始める頃、彼らは、「お祈りの時間」といって席を離れた。そうだらマダ

ンなのだ！それなのに、我々日本人のために、昼食を手配してくれたのだ！ただ、ただ感謝。感謝。

昼食後、仏教最大の遺跡ボルブドゥールを見学。今日も雨が振る。

夕方、それぞれのホストファミリー宅へ別れ、ほとんどのメンバーが初のマンディを体験。

20時ホストファミリーと共にガルーダホテルにて、ラーマヤーナを観劇。

3月15日(日)

KAPPIJA ジョグジャカルタ支部とのセミナー

9時、各ホストファミリーと、アジア、アフリカ(A・A)ホテルに集合。ここは、KAPPIJAのメンバーの一人が経営しているホテルでそこで、KAPPIJA ジョグジャカルタ支部の人々とのセミナーが行われた。

ここでも、ジャカルタと同じインドネシア側から、日本での滞在日程のうち、特に、移動時間の長さ、更に、見学先での滞在の短さが指摘される。

12時半セミナーを終り、ホストファミリーとの日程に移る。

バティック工場、鉄工場へ行ったり、海岸まで足をのばしたメンバー。

街を散策し、ブランドナン寺院に行った人、それぞれ。

しかし、昼をすこし過ぎたころ、我々は、ものすごい雨に見舞われた。日本では、経験したことのないような降雨のすごさ、これが「スコール」というものらしい。

夜、19時20分。VAGABOND ユース・ホステルで夕食会。ホストファミリーと、KAPPIJAメンバーと特別なお料理を囲んで楽しい一時。

特に、仲瀬メンバーは、ホストの Ms NURFITRIANI (フィットリー) と2人でインドネシアのフォークソング、“BURUNG KAKAK TUA”という歌を熱唱。

特に会場は、我々がユースホステルメンバーということで選んでくれた。

3月16日(月)

10時A・Aホテル集合。空港に向う。

空港についても、時間を惜しんでミーティング(?)

12時いよいよお別れの時間が来た。

ジョグジャカルタの暖かい KAPPIJA メンバーと別れを惜みながら空路 バリ島：デンパサールへ。

後でわかったのだが、ングラ・ライ(デンパサール)空港には、メンバーの SIANA (シアン) 氏、KNPIのメンバーが迎えに来てくださったのだが、結局、逢うことが出

来ずメンバーだけでバリビーチホテルへ。

ホテルで、シアン氏、KAPPIJAのNYOMANニョマン氏、Prabhawati（プラバ）さんと会いスケジュールの確認。夕方、シアン氏に、クタビーチ、レギャン通りを案内していただく。

3月17日(火)

8時30分ホテルを出発。ユース・ホステル建設予定地を見学。シアン氏宅を訪問。彼の家は、親族が同じ敷地内に住む大家族。その家の広さ、なんと10ヘクタール。

● 学校訪問

10時30分 プラバさんが教鞭をとっているデンバサール第3中学校見学。

中学校校門では、かわいい生徒達が我々一行を迎えてくれた。

中学校では、先生方とのミーティング、プラバ先生の英語授業を参観。

● KNPI デンバサールとのセミナー

11時30分 デンバサール農業共同組合にて、KNPI デンバサール支部のメンバーとセミナー。

本年度、社会福祉チームで参加した Sugawa（スガワ）氏を座長にセミナー。

なんとここでは、インドネシアのお弁当が用意されびっくり。バリ島はヒンズー教徒が中心なので、ラマダンは無い。楽しい食事だけどチョッピリ、辛かった。（辛いのが苦手なリーダーは、香辛料がかかった部分はほとんど手が付けられなかった。）

KNPIとのセミナーの後、日・イ合弁企業のホテル TOHPATI BALIを訪問。ここには、1987年来日した KAPPIJA メンバー GUNTUR（グンター）氏がコンピューターの仕事をしている。ここは、ビーチからは離れているので、それなりのサービスに苦勞しているとか。客の50%は、日本人とか、又おどろいたことに、ここまでカラオケラウンジがあった。その名も「SAKURA」

カラオケ好きなナカセ チカちゃんさっそく一曲。

8日間の全ての公式行事を終り、ホテルに戻る途中、珍しい儀式を見ることが出来た。ヒンズー、カーストの長老の葬儀を見又、夕方、夕日の美しいタナットの海岸に案内していただいたが、あいにく、ここでも雨、サンセットは見る事が出来なかった。

3月18日(水)

ついに最後の一日になってしまった。

この日は、公式プログラムはなく、女性達はビーチとショッピングへ、男性は、キンタマニーまで足を伸ばしのんびりとした一日を過ごし、夕方空港へ、

空港で、全行程に通訳そして同行していただいたアグス氏と別れ、22時15分（GA872 便）で一路日本へ。

1-3 主要面談者

3月10日

日本大使館

島 薫 一等書記官

JICA

高橋 昭 所 長

山田 保 次 長

椎名 のり子 参 事

交流パーティー

TJAHJO KUMOLO S・H・KNPI 会長、国会議員

IRWANSYAH TANJUNG, KAPPIJA 会長 他

3月12日

青年スポーツ省 (MENPORA)

AKBAR TANJUNG 大臣

H. D BUDIPRAYITNO 大臣第4補佐官

(KAPPIJA 担当)

ABDUL AZIS PARADY 大臣第3補佐官

(ユース・ホステル担当)

KAPPIJA メンバー

Irwansyah Tanjung 会長

Gembong Joko Prasetyo 本年度福祉チーム参加

MENPORA 公務員 他

KNPI メンバー

Francisco Kalbuadi 理事長

Banbang 副理事長

INE 委員・国会議員

Nelson Eddy ♪ (国際担当)

3月13日

青年海外協力隊 隊員

越田 美代子 Bsmbu Apus センター (手工芸)

3月14日 (ジョグジャカルタ)

KAPPIJA メンバー

Saptoto Astokusumo 支部長

田中・ホストファミリー

Neddy Farmanto Sukadis 大城・♪

Nurfitriani 吉武・♪

Triwahuni Jatiningsih 仲瀬・♪

Yasinta Endang Perwi 本年度 ASEAN 学生メンバー 他

3月16日 (デンパサール)

Siana 青年スポーツ省職員

Ir Nyoman ♪

Ni Ketut Prabhawati KAPPIJA メンバー

デパンサール第3中学校教諭

KAPPIJA メンバー

3月17日

デンパサール第3中学校

IKetut Sarwa Sutanaga 校長

他教職員

KNPI バリ支部

Nyoman Sugawa Korry (全国組織の) 副会長

本年度社会福祉メンバー

Dr Igb Wiradharma バリ支部 書記長 他

2. 現地活動報告

2-1 表敬訪問先における意見交換

● JICA インドネシア事務所訪問 3月11日(水) 午前

我々はまず始めに JICA インドネシア事務所を訪問。事務所は、我々の宿舎である、プレジデントホテルの隣にあった。

ここでは、今回のアフターケアチームを担当していただいた、椎名のり子所員、アシスタントのレニーさんと10日間のスケジュール及びインドネシア滞在中の注意事項等をこまかく聞いた後、高橋所長が、ご多用にもかかわらず、我々のため時間を取ってくださり、インドネシアにおける JICA の働きなどについてお話を伺うことが出来た。

それによると、昨年度(平成2年度)の技術協力は、研修受入れが591名。第三国研修(JICA の援助で第三国よりインドネシアにおいて研修を受けている)120名。その他専門家派遣、無償資金協力等々いろいろな分野にひろがっている。

その中の一つ、青年海外協力隊は、昭和62年にスタート、63年より派遣、すでに67名を送り、現在、23地域に36名の隊員が派遣されているとのこと。

明後日は、このうちの一名の活動現場を視察することになっている。

色々お話を伺った後、次の訪問先、日本大使館に行く途中で、これからのスケジュールに同行し、通訳をしてもらおう、AGUS ALAM 氏(アグス)と会う。

● 日本大使館訪問 3月11日(午前)

日程の中にも書いてあるが、JICA 事務所と日本大使館は、道路をへだてて向い側にある。日本ならさしずめ、歩道を渡って歩いて5分のところにあるが、道路事情もあり、車に乗って約20分かかって着いた。

大使館では、一等書記官の島薫氏よりお話を聞いた。

はじめに、JICA 椎名所員より我々の目的、スケジュール、KAPPJA のことなどを説明、書記官からは、「21世紀友情計画」の目的、重要性などが話され、実施協力団体としても、この大切さを十分理解し、この計画が一回でも永く続けられ、日本、インドネシアの交流に役立てたいと話し合った。

● MENRORA (青年スポーツ省) AKABAR TANJONG 大臣

我々は、12日(木)10時に、青年スポーツ省 (MENPORA) に、AKABAR TANJONG 大臣を表敬。

定刻に、昨晚ホテルで行われた交流パーティーで、MENPORA を代表してあいさつしていただいた、第4補佐官の BUDI PRAYITON 氏の案内で、大臣執務室へ。

そこには、小柄ながら、とても大きな人を感じさせる大臣が、日本から来た我々一行を迎えてくれた。その対応は、我々がまるで、100年来の旧友であるかのように迎えられ恐縮してしまった。

大きな執務室には、入って左側に大臣の執務するための大きな机、今回我々が大臣にお話しを伺う時に座ったソファの壁にはインドネシアを代表する絵画、それに、遺品のある調度品が飾られていた。もちろん、部屋の正面には、インドネシアの国章ガルダ。その両側には、建国の父・スカルノ、建設の父・スハルトの肖像画が飾ってある。

我々は、大臣に今回の来イの目的及びユース、ホステル協会は、本年度「21世紀友情計画」で、インドネシアの社会福祉チーム、アセアン混成チーム (学生) 等5チームを担当したことを報告。今回は、アフターケアチームとして、来日した青年達が、日本での経験をいかに生かし活躍しているかを、この目で見せていただくために訪問又、昨日は既に、第3補佐官の ABDUL AZIS PARADY (アジス) 氏から、インドネシアのユース・ホステル運動の現状、今後の計画について伺ったこと又、第4補佐官とは、昨晚の交流会でお会いしたり、沢山の KAPPIJA - 21メンバーと楽しい時間を過ごさせていただいたことをお礼申し上げた。

その時、大臣は一つ一つにうなずかれた後ゆっくりと、一言一言たしかめるようにお話しされた。

「MENPRORA の大臣として、大変うれしいことは、日本とインドネシア及び ASEAN 諸国の若人の中で友好プログラムが実施されていること、たとえば『21世紀友情計画』『青年の船』等々、それらは、どれをとっても、立派な効果を上げている。

現代の若人が、将来立派な指導者になった時、若い時代に参加した、これらのプログラムが大いに役立つことを確信している。

一人でも多くの青年指導者が、このようなプログラムに参加してほしい。

なぜなら、日本の良い点をインドネシアの青年に見てもらいたい。どこが良いかというと、日本は、昔からある日本独自の文化を大切に、守りながら、発展を続けている。

インドネシアも古くから、独自の文化を沢山持っている。それらを大切にするためにも、この友情計画を短期で終らせることなく続けてほしい。

参加した青年は、KAPPIJA-21という同窓会を結成し、立派な活動を続けている。アフターケアチームは、それらの活動も見ていただけるプログラムになっている。」

それに対し、我々は、日本政府でも JICA でもなく、アフターケアのチームであるので、将来計画については何もお答えすることは出来ないが、実施協力団体の一つとして、この計画の大切なこと、素晴らしいことを感じているので、少しでも長期に継続させ、又 ASEAN 等、限られた国に終わることなく、一国でも多くの国の青年へと、輪を広げることを希望することを述べると、大臣は、大きく、やさしくうなずかれていた。

最後に、大臣は、補足するかのように、「JICA-21世紀友情計画は、ブダイプライトノ大臣第四補佐官が、ユース・ホステルは、アジス 大臣第3補佐官が担当しているので話し合っしてほしい。我々インドネシア側も、出来る限りの努力をすることを約束された後、ジョグジャカルタや、バリにも、日本と同じように、古き良き文化が沢山残っている。限られた時間の中で、大変だと思いますが十分に見てください。」と結ばれた。

その時、計画をみると、我々に与えられた時間を大幅にオーバーしていたが、緊張していたせいか、それまでは、全く気が付かなかった。

● 青年海外協力隊 越田美代子隊員を訪問 3月13日(金)

本年度 日本ユース・ホステル協会は、「21世紀友情計画」において、5チームを担当、そのうちの一チームが、長野県にある、駒ヶ岳訓練所を訪問。青年海外協力隊員として、各国に派遣される青年の最終研修を拝見させていただくことが出来た。

そのこともあり、隊員が実際に活動している現場を見たいと思い、アフターケアチームとして、目的からズレるかもしれないが、今回のスケジュールの中に組みこませていただいた。

活動現場は、ジャカルタの中心街より車で1時間、市のはずれというが、我々の感覚では、全くの郊外。舎家。

Bambu Apus という聴覚障害児のための全寮制リハビリセンター。体の一部（このセンターは、耳と口の障害及び一部に知的遅れもあるようだ）に障害を持った子供が、将来、大人になった時に一人前の人間として生きられるように、技術を身に付けさせることが、目的で、我々が訪問した日は、あいにく休日ではあったが、溶接の実習と、協力隊員が担当している手芸、ミシン作業を見ることが出来た。

インドネシアは、人口が多く、労働力があまりにぎみ、健常者ですら、仕事を失なうことが多いこの国で、彼らをいかに、一人立ちさせるかが問題。又技術を教える為にも、機材をどのようにして入手するか、隊員にとっても問題は山積しているようだ。

このセンターというより、この地区かも知れないが、我々の社会から見ると、一昔も二昔

も前の時代に戻ったような気がする。なぜなら、電話はむろんのこと、水道すら無い、文明社会に慣れている若人が、このような地で、献身的に働いている。協力隊員に心から声援を送りたい。

● デンバサール第3中学校訪問 3月17日(火)

インドネシア滞在最終日、「21世紀友情計画」に参加し、来日したことのある BRABA 先生が教鞭をとっているデンバサール第3中学校を訪問することが出来た。

この学校は、個人的な意見かも知れないがデンバサール市内でかなりレベルの高い中学校と思う。

この学校の概要を副校長より聞いたところ

デンバサール第3中学校は、
1952年 経済専門中学校として開校
1972年 国立デンバサール第3中学校となり現在に至る。学生は、725名
1年5クラス。
2年6クラス。
3年5クラス。
合計16クラス(クラス平均49名)
教職員数 84名(教員62名,事務員22名)
授業 一授業は45分 教室は8教室
教室が少ないため、二部制を採用
午前の部 7:30~12:30(途中休み2回)
午後の部 12:40~17:40()

校内及び BRABA 先生の英語授業を参観した後、校長室にて、SARWA 校長よりこの学校が、いかに日本と関係が深いかを伺う。この学校には、日本に研修に行った先生が3名もいる。

校長が1986年、教育文化部門の代表で。(但し、校長が、第3中学校に配属されたのは1990年) BRABA 先生が1988年、「21世紀友情計画」の教育グループで。

1990年には、全インドネシア27州の中から模範教員として20名が選ばれ日本に研修に行ったその中に、同第3中学校より2名が選ばれたとのこと。

以上のようなことから、同第3中学校は、日本と関係が深く、日本との交流が盛んに行わ

れているとのことであった。

グループより、児童の就学率を聞いたところ、「小学校から中学校へ進学する児童は、90%、残り10%は、交通手段等の理由で進学しない。又、中学校に入るためには、小学校6年の時、中学進学テストがあるが、これは、ほぼ全員が合格するとか。近い将来に廃止されるとのこと。又、進学出来ない子供達のために、文部省では、訪問学習を実施しているとともに、近く、中学校も、義務教育になる予定とか。

気が付いて見ると、ジャカルタ市内では、物を売る子供を多くみかけたが、ここデンパサールでは、あまり見ることがなかった。

2-2 帰国青年同窓会の活動状況

● インドネシアの空港ロビーに降り立った瞬間感じたことは、インドネシアはやはり南国、熱帯の国だということでした。時刻も5時を過ぎ、天気も曇空ながらかなり蒸し暑かったです。インドネシアが日本より南にあり、赤道直下であることを考えると当然ではありますが、この時間この天気での暑さなら晴れたらどんなに暑くなるか、そのことを考えると明日からの日程が思いやられました。しかし、10日間の日程中は幸いにも天気（曇又は一時雨）にも恵まれ、JICA 事務所の高橋所長をはじめ担当者の椎名所員にもいろいろと御配慮いただき、当初長いと思っていた10日間があっというまに過ぎました。調査の中で一番ビックリしたのは KAPPIJA のメンバーが、皆 重要な仕事に就いておりインドネシアで活躍していることでした。

それと同時にほとんど親日家になっていました。今後 KAPPIJA の組織が充実し発展すればインドネシアで大きな勢力になることは当然ですが、日本との交流にも中心的役割をはたすでしょう。KAPPIJA のメンバーには、私達4人のために集まってもらい、またいろいろと面倒をみてくれた事に対して深く感謝しております。ジャカルタでは、KAPPIJA の3人の美女と夕食を共にし一緒にドライブを行う機会にめぐまれました。車中での彼女達との楽しい会話を今でも思い出します。ジョグジャカルタでは、空港での出迎えから見送りまでずっとつきあってくれました。そこではホームステイも予定されており、ラマダンの時期でもありまともな食事ができるかどうか心配でしたが、そんなことはまったく無用の心配でした。バリでも、仕事を休んで一日中私達を案内してくれました。こちらにもその気持ちがひしひしと伝わってきました。実際、その国にいてみると前と後ではその国に寄せる関心も好意の度合いがやはり違うと思います。KAPPIJA のメンバーも私達と同じように、日本に行った後そう感じたと思います。このアフター調査に参加して、インドネシア側のこの「21世紀のための友情計画事業」にかける期待、そしてこの事業の素晴らしさを再認識しました。今

後とも継続してほしいと思います。

● 現在までのインドネシア同窓会の主な出来事は以下のとおりである。

1985. 3. 18 第一回総会

- ・「IKATAN ALUMNI INDONEASIA JEPANG」(インドネシア日本同窓会設立)
- ・委員選出(会長 SAMUSUDDIN 任期1年)

1986. 1. 30 第二回総会

～2. 1 「KELUARGA ALUMNI PERRSAHABATAN INDONESIA JEPANG」(インドネシア日本友好同窓会) KAPPIJA21に改称

- ・委員改選(会長 DARUL SISKA 任期1年)

1987 ジョグジャカルタ支部設立記念式典

1988 第三回総会

- ・委員改選(会長 YAN HIKSAS 任期2年)

1988. 2 「AJAFA21年次実行委員会総会」インドネシアにて開催

1990. 12. 14 第四回総会

- 12. 16 委員改選(会長 Mr. IRWANSYAH TANCJUNG 任期2年)

1991. 11. 10 「第2回 Jafa-21 REGIONAL YOUTH CAMP」をインドネシアが開

—11. 17 催する

1991-92年期 KAPPIJA21委員名簿

現在の委員は以下のとおりである。

アドバイザー 青年スポーツ省大臣 Mr. IR. AKBAR. TANDJUNG

カウンセラー ERIGFEND. D. BUDIPRAYITNO

RUDY JOHANES, SH

TJARYO KUMOLO, SH

IR. HARRIS ALI MOERFI, M. SC

YAN HIKSAS, SE

PATRIALIS AKBAR, SH

会 長 IR. IRWANSYAH TANDJUNG

書 記 ANDROMEDA AZANNATARI, SE

会 計 DRA. MAISURI RAIS

副会長 CHAIRUL ANAM, MZD DRS. YUSRA KILUN

ZULFADLI BARUS, SH H. SYARIFUDDIN SOELTAN
 DRS. MANSYUR M. ILYAS DRS. GHEIS CHALIFAH
 DEDY MARDANA DRS. ISRIN CHANDRA
 EDDY SAPUTRA, SE
 副書記 FEPDIANSYSH CHAMSIAR, B, SC.
 DRA. ANASTASIA SHP DRS. MANSUR
 SOFYAN ACHMAD, SH LILIK S. HARYANTO
 会計補佐 HARI AMPERA K. ACHMAD AFFAN
 DIAN MARDIANI IR. A. LINDA
 会員組織部 MDH. SUKRI TAUFIK LATJUSA
 IR. ALFAREZA
 教育研究開発部 DRS. FAUZI BOESTAMI ARISE AGUSDHANI
 DRS. RIDWAN HASSAN
 スポーツ部 ALFEUS SIREGAR NICODEMUS EMMANUEL
 ABDUL HAKIN T.
 旅行部 ELIANASULAIMAN NISFAL
 ELLA UMI MARJILAH
 社会文化部 IR. HANDITO HADI JOEWONO S. E. SHOMI
 VIDA AJULIANTI
 外務協力部 DEDEN RUKMANA AKRAR DESRINA EMMA
 ARITONANG DRS. JONED CEILENDRA
 広報報道部 R. A. YANI TRIHANDAYANI, SH YANI WAHYUNING MURTIWAN
 NO VERIE
 社会福祉部 MUSLIMAH ABIDIN AINUN HASANAH N.
 DWIKORA PUTRA N.
 財務部 NANA YUKIANA SATI AWALIA
 TEUNGKU PARAMESWARA, SH.

● KAPPIJA21各部の業務

現在、インドネシア同窓会の組織は3-3-2のとおり会長1名、副会長9名、書記1名、副書記6名、会計1名、会計補佐4名の他、9つの部門より成り立っている。各部の業務は以下のとおりとのことである。

会員組織部 (Department of Organization and Membership)

1 同窓会組織の課題点について検討。

2 インドネシア全国の同窓会支部の調整

教育研究開発部 (Department of Education, Research and Development)

1 第4回「インドネシア日本21世紀研究」の継続

2 日本語コースの実施 (1991年2月より)

3 インドネシア青年の日本理解についての調査実施

広報報道部 (Department of Public Relation and Press)

1 「PERSAHABATAN21」誌の発行

2 報道, ジャーナリスト・トレーニングの実施

社会文化部 (Department of Social and culture)

1 日本インドネシア週間の実施

財務部 (Department of Treasure)

1 同窓会活動財源の確保

旅行部 (Department of Tourism)

1 同窓会カウンターパートのインドネシア訪問受入れ

2 ホームステイの実施

外務協力部 (Department of Foreign Affair Cooperation)

1 国際的役割, 問題の検討

2 同窓会組織をインドネシアの学生と青年の日本学習の中心にする

3 日本再訪問計画の支援

スポーツ部 (Department of Sport)

1 テニストーナメントの実施

2 ジュニア空手トーナメントの実施

社会福祉部

1 健康維持サービス, 職業訓練等の社会奉仕活動の展開

KAPPIJA 会員国内分布 (90年末現在)

現在, インドネシア国内の KAPPIJA21会員の人数は表1のとおりである。

● 1990年の主な活動

1 1991年2月21-23日

第4回 AJAFA -21年次評議会於て: シンガポール

KAPPIJA -21からはイルワンシャ・タンジュング会長とユスラ・キルン副会長が参加

- 2 1991年2月-11月 日本語コース
JICA から派遣されたタマキ・ジュンコ氏がジャカルタとランブング地区の KAPPIJA -21 会員 (50名) 日本語を教授。
- 3 1991年2月25日-3月16日 日本訪問 (招待)
チョイルル・アノム KAPPIJA -21副会長とサブトト・AKAPPIJA -21ジョグジャカルタ地区会長が日本青年協会の招待で日本訪問。
- 4 1991年3月7-15日 JICA アフターケアチーム訪問
荒木秀子, 沢柳宏友, 高木秀夫, 伊藤達夫, 醍醐和恵の5名がジャカルタ, バンドン及びバリを訪問し, KAPPIJA -21と JICA の関係に関する問題を協議する。
- 5 1991年5月20-27日 第1回出発前オリエンテーションプログラム
55名が参加 (環境問題と人間の生命部会参加者20名, 教員25名, アセアン学生5名, アセアン教員5名)
- 6 1991年7月 インドネシア青年国民会議祝賀会に招待される
- 7 1991年7月23日-8月3日 水戸第一高等学校インドネシア訪問
水戸第一高等学校から教員3名と生徒18名がジャカルタ, ジョグジャカルタ及びバリを訪問。ホームステイをする。
- 8 1991年8月12-19日 第2回出発前オリエンテーションプログラム
55名が参加 (勤労青年25名, 社会福祉部会20名, アセアン公務員第一グループ5名, アセアン公務員第2グループ)
- 9 1991年9月23-30日 第3回出発前オリエンテーションプログラム
学生 (参加者数不明) と農業青年20名が参加。
- 10 1991年10月5日 日本大使館より, ジャカルタのホテルヒルトンで催うされた天皇・皇后ご列席の晩餐会に招待される。

- 11 1991年10月23日 青年の日祝賀
青年スポーツ省主催の討論及びセミナーに参加する。
- 12 1991年11月12日 天皇誕生日をお祝いする日本国大使国広道彦夫妻主催のパーティに KAPPIJA -21会長が招待される。
- 13 1991年11月10-17日 第2回地区青年キャンプ
第2回 AJAFA21地区青年キャンプをインドネシア各地(ジャカルタ, ヲノゴリ, ジョグジャカルタ及びバリ)で開催する。目的は、若年青年の責任、特にアセアンと日本の開発及び協力に関する責務を向上することにある。

なお上記以外に「インドネシア日本21世紀」セミナーの実施や写真コンテストなどを行った

● 1992年の主な活動予定

昨年11月に行った第2回 AJAFA -21 REGIONAL YOUTHCAMP のような、大きな事業はないが、今年6年にインドネシア学生空手大会を予定しているとのこと。あとは例年行っている「インドネシア日本21世紀セミナー」の継続などが予定されています。

(90年末 現在)

	ASEAN 混成公務員	ASEAN 混成教員	公務員	学生	農業 青年	勤労 青年	教員	テーマ A	テーマ B	青年 指導者	計
ジャカルタ特別市	57	8	60	89	52	112	61	3	6	47	495
アチェ特別州			5	4	6	6	4	1		4	30
スマトラ	1		3	9	6	6	7	1	2	1	39
南スマトラ			2	3	2	2	4	1	1	4	16
西スマトラ				1	2	3	5		1	4	16
ランブン	1	1		3	3	4	3		1	2	17
ブンケル			1		2		2			1	7
リアウ			1	2	2	2	2		1	1	11
ジャンビ				1	1		3		1	3	9
西部ジャワ	7		10	25	22	18	15	6	5	7	115
中部ジャワ	2		4	7	6	8	5	2		5	39
東部ジャワ	3		2	9	6	5	3	2	2	4	36
ジョグジャカルタ特別州		1	2	10	5	5	4	3	2	4	35
中部カリマンタン			1	1	2	1	2		2	1	11
東カリマンタン			1	2	3	2	3	1		1	13
西カリマンタン				3	3		1	1	1	2	11
南カリマンタン	1		2	2	2	2	4		1	1	15
南スラウエシ				5	2	2	4	1	1	2	17
中部スラウエシ			1	2		2	4		1	1	11
東南スラウエシ			1	1			1			1	4
北スラウエシ				3	3	5	5		3	5	24
西ヌサテンガラ			2		5	2	6		1	3	19
東ヌサテンガラ			1	2	2	1	2			2	10
バリ	1		1	1	2	1	2			3	11
マルク			2	1	3	3	3		1	4	17
西イリアン				3		2		4		1	10
東モチール				2	1	3		3		2	11
計	73	10	102	191	143	197	155	29	33	116	1049

2-3 セミナー交流会実施状況

● 交流パーティー

チームがインドネシアに到着した翌日、3月11日の午後6時からプレジデントホテルで交流パーティーが開かれた。このパーティーには、KAPPIJAのメンバー、JICAスタッフ、青年海外協力隊隊員など沢山の方々が参加して始まった。まず、アフターケアチーム側のリーダーより、メンバーの紹介、今回の目的、日程説明などの後、「21世紀友情計画」を通じて、インドネシアと日本の青年の交流がより盛んになるように希望しますとのあいさつを述べた。続いてJICAの高橋所長、インドネシア青年スポーツ省のプディプライトノ第4補佐官から、プログラム協力に対するお礼と、今後「21世紀友情計画」が両国の友情と相互の発展につながるよう希望するとのあいさつをいただいた。

パーティーは、なごやかな雰囲気の中で進んだ。本年度ユースホステル協会が受け入れた青年が一人も来なかったのは残念だったが、KAPPIJAのメンバーは皆、フレンドリーで楽しい人達だったのですぐに友達になり、楽しいひとときを持てた。

● KAPPIJA とのセミナー(1)

3月12日午前11時にKAPPIJAを訪問。お互いにメンバーを紹介し、リーダーによる調査団の訪問目的の説明の後セミナーに入る。

はじめに、KAPPIJAのイルワンシャ会長から「インドネシアには、同窓会としてKAPPIJAがあるが、日本には、このようなネットワークがあるか。あれば、ネットワークが広がり情報交換が出来、日本とのつながりをより深くしたい。なければ、このような目的から、参加青年の組織化をしてほしいが、その予定はあるか。」又、「合宿セミナーなどに参加した青年は、個人個人JICAに登録されているのか。」との質問があり、チーム側からは「このプログラムに協力している団体（実施協力団体）は、JICAを『軸』に連絡網を持っているが、参加青年は、団体ごとにまとまっており、他の団体との連絡、青年間の連絡は密でないので、KAPPIJAのような会を作るのは難しいと思う。」と回答。

翌日KAPPIJAとのセミナーが予定されたいので、そのテーマについても話し合いその結果、次のような項目が挙げられた。

- 1 日本に行く前と後では、日本に対する印象はどのように変化したか。
- 2 日本に行ったことが、どのように役に立ったか
- 3 両国の文化や習慣の違いで気が付いたこと
- 4 「21世紀の友情計画」のプログラムに対する要望

以上のような具体的内容について翌日会うことを約束して終了した。

● KAPPIJA とのセミナー(2)

3月13日、KAPPIJA メンバーと昨日に引き続き、午後4時よりセミナーを行った。

内容は、昨日決めた項目について話し合うことになった。

- 1 日本に行く前は、日本人はいばっているという先入観があった。しかし、現実はそのような点は少しもなく、相手・相手国を尊重する国民だと思った。
- 2 日本に行ったことが、どのように役に立ったか
- 3 両国の文化や習慣の違いで気が付いたこと
 - ・ 日本は、大変に進歩している国だ。しかし、古いもの、古い文化を大切に守りながら、新しいものを取り入れている。
 - ・ 日本人は時間を大切にする国民だと思った。またそのことはビジネスにおいて、非常に重要なことである。
 - ・ 日本人は規律を重視し、勤勉であるが宗教観が薄い。インドネシア人はその逆で、自分の宗教観を持ち、そのことを誇りにしている。
- 4 「21世紀友情計画」のプログラムに対する要望
 - ・ 全体としてプログラムはうまく計画されている。しかし、訪問するところが多過ぎる。午前1カ所、午後1カ所ぐらいのペースであれば問題はない。
 - ・ スポーツ交流など、リラックス出来る時間を増やしてほしい。
 - ・ ホームステイの日数が2～3日では少ない。もっと長く居たかった。ホームステイでは、言葉の壁は有ったが、お互いの努力によって理解しあえたことは、大変印象深かった。
 - ・ 合宿セミナー、ホストファミリーなどこのプログラムに参加した人達が組織化し、我々と交流を続けられるようにしてほしい。
 - ・ 残念なことに、日本青年の中には、インドネシアについて知識が全くない人がいた。そのような人は、勉強してから、参加してほしい。

などの意見、提案が出た後、KAPPIJA 会長より、「JICA とともに、ユース・ホステル協会としても、インドネシアと日本の交流が盛んになるよう努力してほしい」とあいさつされ、ジャカルタでのセミナーを終えた。

● KAPPIJA (ジョグジャカルタ) とのセミナー(1)

3月15日、午前9時から、市内にある KAPPIJA メンバーが経営するホテルで、リラックスしたムードで話し合った。

セミナーの内容は大筋で同じだが、もう一度確認してみたい。

- ・ 京都、名古屋などの観光地の訪問が、あわただしすぎる。
- ・ 移動に時間がかかりすぎる。

- ・ ホームステイでも、家族、家庭で過ごせず、観光で忙しく、ゆったり出来なかった。もっと地方の活動（ボーイスカウト、音楽のレッスンなど）を見たり、地方の人々と触れ合うような機会をつくって欲しい。
 - ・ ホストファミリーも、出来るだけ普通の生活を見せてほしい。
 - ・ 宗教に関すること（食べ物、習慣など）は尊重してほしい。
 - ・ 合宿セミナーのディスカッションが形式的なものになりやすい。もっとくだけたもので良いのではないか。
 - ・ このプログラムを交流に留めるのではなく、技術的なものを学べる機会を作してほしい。
- 又、日本の印象については、ジャカルタと同じであり、「日本は先進国でありながら、伝統的なものを守っている」という感想があった。

逆に KAPPIJA 側からの質問が出た。それはインドネシア、インドネシア人についてどう思うかというものであった。メンバーの回答は、つぎのようなものであった。

- ・ インドネシア人は自分を大切にす国民だと感じた。
- ・ 集団の和を大切にすところが日本人に似ている。
- ・ 素朴で親切
- ・ 宗教を大切にす。日本人の宗教観とは全く異なり、興味深い。

これらのほか、KAPPIJA メンバーの関心が高い問題として、日本からの資金援助や奨学金などのことが挙げられた。特に、KAPPIJA の運営資金を心配するメンバー、再来日し、技術や知識を得たいと希望するメンバーが多いことと彼らが熱心なのに驚かされた。

KAPPIJA メンバーは、インドネシアの中でも、かなりのエリートだと思うが、そのメンバーにとっても、日本は憧れの国なのだ、と実感した。我々アフターケアチームは、資金面など具体的なことは約束出来ないし又、我々の立場（アフターケアチーム）を KAPPIJA は理解しながらも、繰返し話題にのぼった。

● KAPPIJA = ジョグジャカルタメンバーとの交流会

3月15日午後9時から、市内のバガボンドユース・ホテルで開いた。交流会といっても、皆で夕食を食べながら滞在した2日間について、リラックスしたムードで話し合った。

会場のユース・ホテルは、小さいが、アットホームな感じであった。食卓は、客を歓迎する意味を持つという伝統的料理で飾られ、チーム一同感激。

KAPPIJA メンバー達は、一つ一つの料理について説明してくれたり、楽しかった日本で思い出話をしてくれたり、いろいろと気をくばってくれた。おかげで、私達アフターケアチームも、忙しいスケジュールをわすれ、ジョグジャカルタでの最後の夜を大変楽しく過ごすことが出来た。

ジョグジャカルタの KAPPIJA メンバーとは、ホームステイで御世話になったこともあり、非常に親密になり、わすれがたい思い出となった。

やはり、ホームステイは、プログラムの重要な部分だと感じた。

● バリ島での KAPPIJA, KNPI とのセミナー

3月17日、午前11時、デンパサールにある農業協同団体の会議室で、KAPPIJA, KNPI（青年協議会）メンバーとセミナーを行った。

今回の座長を務めたスガワ氏は、KNPI バリ支部の議長で、本年度のインドネシア福祉チームで来日。各地の福祉施設などを見学し、その経験を KNPI の活動に活かした。

3. 訪問国における青少年団体の活動状況

KNPI

青年組織の代表の一つである KNPI と 2 回セミナーを開くことが出来た。一つは、KNPI 本部（ジャカルタ）と、デンパサールにあるバリ州支部である。

団体（KNPI）の目的

1. インドネシア開発への奉仕
1. 生活環境の向上
1. 貧困の解消
1. 青年に対する仕事の提供
1. 外国文化の悪い影響の防止

歴史と組織

発 足 1973年（昭和48年）

会 員 31青年団体（注）、2800万人、（インドネシア青年17～40才の約40%が会員）

構 成 本部の下に27全州に支部を設置。その下には県単位の組織がある。

総 会 総会は3年に1回、10月28日〔青年の日（祝日）〕に27全州の代表が参加して開かれ、本部委員（32名）もそこで選出される。

収 入 個人、法人の寄附、政府の援助からなり、政府援助は全体の40%を占める。

※ KNPI に加入するための条件

1. 青年団体であること

1. 全国組織の団体であること

・インドネシア27州のうち、18州以上に支部組織を持ち、活動していること。

・内務省に登録されていること

2. インドネシア建国5原則に基づいて活動していること

・サンスクリット語で「パンチャ・シラ」スカルノ前大統領がインドネシア独立に際し、神への信仰・主権在民・人道主義・社会主義の5項目を提案し、その後憲法の前文に組み入れられた。時代がスハルトに変わっても、5原則は国民に定着し現在に至っている。

特に、「神への信仰」は、国民の90%以上がイスラム教徒の中にありながら、宗教の自由選択権を保証している。

メンバーの話

91年度、テーマB（社会福祉チーム）にて来日したスガワ氏（バリ支部議長）と話しをすることが出来た。

彼は、バリの農業開発、発展組合（日本の農協とほぼ同じ役割）で役員を務める傍ら、KNPIにおいて、社会福祉の向上に務めている。

スガワ氏によると、日本の社会福祉政策はおどろかさせることばかりだったとか。

一例だが、

目の不自由な人への点字ブロック

身体障害者・老人への保護とその為の施設整備

インドネシアの福祉は、まず最初に、貧困を解消することからはじめなくてはならない。スタートラインは違うが、日本で見たもの、聞いたものは、大いに役に立った。KNPIの一員として、行政と話し合い出来ることから一つ一つ、進めたい、又その為にも我々はこの運動をすすめている。

又、この運動が全国民に認められている証明として、メンバーの中から、大臣、知事、国会議員及び各国大使が選出されている。

4. 青年招へい事業に対する相手国の評価

● 青年スポーツ省大臣

青年スポーツ省大臣は、訪問団に対して心から歓迎の意を表し次のように述べられた。

「将来の事を考えると「21世紀のための友情計画」はたいへん素晴らしく、この事業によって両国の友好・協力関係はいつそう強固なものになると確信しております。この事業は政府間レベルだけでなく社会のいろいろなレベルでの交流を行い、未来の指導者たる青年達に重点が置かれている事はたいへん素晴らしい有意義なことであり、インドネシア政府としても出来るだけ優秀な青年を派遣するよう努めて今す。また、この事業は日本とインドネシアだけの友好だけでなくアセアン各国との友好を深める事にも貢献しています。この事業に感謝し、今後ともこの事業が続く事を希望します。派遣された多くの青年が、日本で貴重な体験と知識を得てきます。政府としてもその体験と知識をインドネシアの国づくりに生かしたいとおもいます。」

なお、当初30分間の表敬予定時間が15分延びて45分になった事からも大臣のこの事業にかける期待の大きさが理解できる。

● 帰国青年

・たいへん素晴らしい事業であり、テレビや新聞等でしか知る機会のなかった日本を自分の目でたしかめる事が出来た。今後とも継続してほしいと思う。

また、この事業の成果を生かすためにも今後とも交流を活発に行いたい。

・プログラム実施のうえで、特にホームステイで言語の障害があり十分なコミュニケーションをとることが難しい。

・訪問先が多いので、よく理解出来ないところがあった。



5. 調査チーム参加者の感想

仲瀬慎子

① ホームステイ

初めてのホームステイ、しかもインドネシアということで、不安と期待が入りまじっていた。私のホストファミリーは、WAHYUNI WIDIYANTO 夫妻とその息子3才の KARTIKO (通称 IKO) 君だ。

イスラム教国ということで、トイレとお風呂が心配だった。私は、はじめマンディという名なので、屋外であるのかと思っていたが、そんなはずがあるわけはなく、トイレとマンディ場は一緒にあった。そのマンディも、普通は、水なのだが、なれない私のために、YUNIさんが気をつけて、お湯を用意してくれた。ただ、トイレだけは“郷に入って郷に従え”は出来なかった。どうしてかという、紙を使い流してしまった。

食事も「お料理が大好き」という YUNI さんの作ったお料理はとてもおいしかった。

私達が訪問中は、ちょうど、イスラム教のラマダン (断食) の期間だったが、ホストファミリーには、小さな子供がいたので、それほど厳格には行っていないようだった。しかし YUNI さん夫妻は、早朝起き出して食事だろうか、お祈りだろうかガタガタしていた。

後で YUNI さんに聞いた話だが、この付近では外国人 (特にオランダ人) のことを「ロン

ド」と呼ぶ。YUNIさんの家のお手伝いさんが、私のことを、ロンドと言ったらしい。そうしたら、3才のIKO君は「CHIKAKOはインドネシア語を話すからロンドじゃない!」と言ったそうだ。私はジーンときてしまった。

もうひとつ、2泊のホームステイを終り、ジョグジャカルタを発つ朝、私がトランクをつめてっていると、IKO君は、「帰っちゃダメ!」とダダをこねて拗ねてしまった。これもとても嬉しくて、泣いてしまった。何年かしても、彼が、IKO君が、私を覚えていてくれるだろうか。

② 感想

平成3年度「21世紀友情計画」では、実施協力団体として、プログラムを作り、来日青年とコーディネータとしての1ヵ月の行動を共にし、今回アフターケアインドネシアチームに参加と、あらゆる機会に恵まれた。

アフターケアでは、プログラムを作る立場と、それに参加する立場の両者を同時に体験することが出来た。それすなわち、自分の仕事の見なおし、反省又は、次へのステップを大きくふみ出すことが出来た。

この計画に参加した青年の帰国後の活動状況を実際に見て廻り、いかにこの計画が大切なものであるかを、改めて感じてた。

③ 日程と内容

両国とも同じだが、相手に自分の国を見てもらいたいと思う心が走るのか、スケジュールがハードになりがちである。ホスト役の時は、それほど意識しなかったが、今回ゲストとして迎えられた立場の時には、これがいかに重いことか十二分に感じた。

アフターケアはたった10日でこれだから1ヵ月のスケジュールは、それなりにゆとりを持った配慮が必要と思う。

④ プログラム

現地でのプログラムは、チームの希望を100%受け入れられた素晴らしいものであった。ただ一つ欲を言うと、この素晴らしいプログラムを日本を出発する前に入手したかった。というのは、予想以上に各所における意見交換が出来たのは、うれしいことだが、事前情報が無いため、不勉強、データ不足のまま参加したことを、KAPPIJAメンバー及び、意見交換に参加した方々にお詫びせざるを得ない。

⑤ 生活と宗教

日本人は宗教観、宗教意識が無いと云われる。今回もそのことが何度となくテーマに挙がった。彼らは、決して日本人の宗教意識を持たないことを非難するのではなく、宗教を大切にす青年の生活を大切にしてほしいというもっともな意見であった。

たとえば、宗教的理由で食べてはいけない物をムリにすすめることなど、決してしてはいけないことと思う。今回、訪問した時は、イスラム教のラマダン（断食）の時にあたり、我々も大変珍しい体験をした。ジャカルタのファーストフードの店は、夕方見た時は、カーテンを開き店内がよく見えたが、昼間営業中なのにカーテンを締めている。初めは、強い日差しを避けるぐらいに考えていたが、それはなんと、ラマダンの時、昼間何も口にはしないイスラム教徒のための店の配慮とか。ただただ、おどろくばかり。特にジョグジャカルタのホームステイ、私のホストファミリーは、KAPPIJA ジョグジャカルタ支部の会長、熱心なイスラム教徒の新婚さん。まず早朝4時、街を流れるコーランで目をさまし、それから朝会、その後ラマダンの今は夕方6時まで一切を口にしない。その若夫婦が私に気を遣って、食事やお茶をすすめてくれるが、たった数日、一回や2回昼食を抜いたからといってどうということはないが、本音のところ、にわかモスレムは楽でなかった。

昨年、インドネシア青年のグループの受け入れを通じて、インドネシアのことを少しだけ学んだが、やはり実際に行ってみて初めてより深く理解できたと思う。ホームステイは特に印象深かった。私を受け入れてくれたファミリーは、10人の大家族だったが、みんな大変親切だった。ちょうど断食の期間にあたり、ホストファミリーも、きちんとその習慣を守っていたが、日本とは全く違う宗教観や、それに伴う生活習慣に触れ、興味深かった。帰国青年や多くの関係者の方々に会うことができ、プログラム全体をつかむことができたと思う。また、いろいろな方々とお話をして、インドネシアという国また、日本との関係について考える機会を得たように思う。この経験を「21世紀の友情計画」のプログラム作りに役立てるよう、努力すると共に、アセアンの国々の青年と日本人の橋渡しのお手伝いをしていきたいと思う。

全体を通して、結構ハードなスケジュールだったと思う。私など特に他のメンバーと違い、一人のボランティアメンバーとしての参加なので、セミナーの時など何を言ってよいのかわからず、ただ、その席に座っていたにすぎなかった。せっかくメンバーになれたのに、他の方には、こんな私で申し訳けなかった。ただ、日本で普通に生活をしている限り、在外国の日本大使館や、大臣、国会議員の方々とお会いしたり、お話をすることは出来ないと思う。とても、素晴らしい体験をした。このような機会は、これが最初で最後と思う。

私の仕事は、京都の映画村フロント係。外国のお客様と接することも多く、勿論インドネシアのお友達もいたが、今回このアフターケアに参加出来たことで又、新しい友達がたく

さん出来とても嬉しい。

インドネシアの人々は本当に暖かい。ますます好きになった。また行きたい。また、「21世紀友情計画」で青年達が、見学コースとして京都を訪れる時間が許すかぎり、来京の人々のお世話をしたいと思う。

6. 提 言

いつも、受入れの立場で彼らに接してきたので日本滞在中の彼らの苦勞は知りませんでした。今回初めて自分達が派遣メンバーの一員となって彼らの苦勞を知りました。わずか10日間ではありますが、いろいろなところを視察し、いろいろな人と接してみると10日間という日程ではかなりきついと思いました。夜宿舎に帰ったときはほっとしたのが実情です。まして1月間にもなるとその疲勞度は並大抵の事ではないと思います。おそらく毎日のように続く視察や歓迎パーティのために、会う人も多く、名前と顔がすんなり結びつかないのでは。KAPPIJA との話し合いでも同じような事が話題になりましたが、できる限り余裕をもったスケジュールをくみ、あれもこれも見せるのではなくポイントを絞って行くべきだと思います。それと、日本訪問後も彼らは交流の継続を希望しています、しかも単に個人的な関係での交流でなく組織的な交流を、インドネシアにはそれを実現できる組織として KAPPIJA がありますが日本にはそれに対応する組織がありません。その組織の必要性を感じました。また、予算の問題もあり難しいと思いますが受け入れに関係している多くの日本人青年が、もっと多く自分達が受入れをしているその国を訪問できるようにしてもらいたいです。なお最後に今回のインドネシア訪問のプログラムの詳細が、現地に到着するまでわからなかったり、調査団側の希望と受入側の意図が食い違っていたりしました。また、プログラムの目的の認識が、お互い足りなかったではないかと思います。それから、一般の参加者の負担（特に宿泊料）が大きいと思われるので、何かよい方法がないか（例として JICA に負担して頂く）、検討していただきたいと思います。

